

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA

でほら

36

2009年
春夏号

特集

ふるさとへ帰る!

Uターンした人の生活と意見



宝くじ

本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

農

山村や地方都市では、若者は大学や専門学校へ行くために家を出て、そのまま都市で就職し、ふるさとへ帰らないケースが多い。離島や交通の便が悪い山村では、中学卒業と同時に親元を離れて高校へ行く状況が今も続いている。

地方や山村の過疎化は、若者たちの離村が最大の原因となっている。親たちも子どもたちが出ていくことを当然と受け止め、卒業後も「農林業では食べていけない」「田舎には働く場所がない」と、子どもの帰郷を促すことはしてこなかった。事実、都市には若者が能力を生かして仕事し結婚し子どもを教育していける条件が揃っており、田舎には少ない。しかし気がついたら田舎には、若者や子どもたちの姿が消え、親たちも高齢化した。田畑の休耕地が増え、山も手入れされないまま農林漁業の基幹産業はもとより、地域の伝統工芸や文化等が崩壊寸前になっている。

といて、早い時期にふるさとを出た子どもたちには郷里への愛着も少なく、多忙で人間関係が複雑な都市生活をしていると、地方の深刻な過疎化に思いをはせる余裕もない。山村の自治体や関係機関では過疎化対策、地域再生の方策として、都市の人に田舎に来てもらうU・ターンの導入や、時々来村して地域の人と交流してもらう「交流移住」制度などを積極的に取り入れ出しているが、まだ地域が活力を取り戻すには至っていない。

田

舎を出た人はなぜふるさとへ戻らないのか。彼らにその意思がないのか、親が帰ってこなくていいと言っているのか。長年地方取材をしながら、よくそのことを考えた。自治体やJAも都市からの移住者を募るUターン対策には熱心だが、ふるさとを出て

行った人たちに帰郷を促すアプローチは殆どしていない。Uターンしてもらうためには住居や仕事の斡旋等が必要だが、Uターン者なら親の家があり地域のこともよく知っているので就労もしやすい。なぜ「帰らないか」と声をかけないのか。

今回Uターン特集をしようと思ったのも、そんな疑問からである。そのため各地の市町村に「Uターンした人を紹介してほしい」と電話を入れたが、Uターンした人を把握しているケースは少なく、「Uターンした人はいない」という返事も多かった。

Uターンは各戸や個人の問題で、他人が口出しすることではないという意識が行政にも地域の人々にもあるようだ。住民たちにも「みっともないから息子に帰ってきてほしくない」、たとえ老いて独り暮らしが困難になっても「地域の世話になる、息子には心配かけられない」という高齢者が大半だと聞く。

で

ぼら」36号では「ふるさとへ帰る！」と題して特集する。取材した人は皆ふるさとの自然環境を愛し地域の活性化を切望しながら、都市暮らしで培ったキャリアや資格を生かして、田舎ならではのビジネスに着手し、自然とのふれあいや趣味的生活を楽しんでいる。

Uターンするきっかけは、親の病气、企業の定年退職、都市生活への疑問等さまざまだが、厳しい自然環境も経済的格差もプラス材料に代えて、いきいきと暮らしすることに大変感動した。そして、Uターンに賛成し、田舎暮らしを支えている奥さんや子供たち、迎えた親たちの存在がいかに大きかったかを改めて知った。

特集に当たっては、トップにUターンして



「杣の里」(福岡県矢部村)を散策する秋丸さん夫妻

自分が目指していた仕事に取り組む若者たちの「Uターンしてステップアップ」、次に定年を機に帰郷し農業やキャリアを生かして地域に貢献している「生涯現役」定年後はふるさとへ」、そして最後に、田舎だから可能なビジネスや田舎に必要な新事業等に取り組む人々を「地域資源をビジネスと活力に」と題して紹介させてもらった。

折しも世界は大不況時代を迎え、日本でも仕事を失い住む家もない人、リストラされた人などが都市にあふれている。それをチャンスと地方の企業や慢性的な人手不足だった福祉施設等が就労を呼びかけている。先日都内で「森林の仕事ガイダンス」(全国森林組合連合会主催)の説明会を開催したところ2日間で5260人が訪れたという。

この際、田舎へ帰って仕事を探してほしい。今まで人手不足で悩んでいた農業や林業、水産業、高齢者の介護など、あなたを必要としている仕事がいっている。まずは体験し、根気よく仕事を覚え、心を開いて地域の人々と接すること。

本誌のこの特集が、U・ターンの弾みをつけるいい機会になって欲しいと願っている。

「でぼら」編集部

財団法人 過疎地域問題調査会

ふるさとへ帰る! Uターンした人の生活を発見

● 特集企画に寄せて

「ふるさとへ帰る!——Uターンした人の生活と意見」

●特集企画に寄せて—— 2



▲長男が定年帰農、嬉しそうなお母・畠中イクヨさん

■Uターンしてステップアップ

- **山を育て森を作り、木にこだわる**
[わにもっこ] 山内将才さん
(青森県大鰐町) —— 4
- **災害を契機に、輪島の食文化と向き合う** [輪食] 安原信治さん
(石川県輪島市) —— 8
- **女性の感性をお酒や地域に生かして** [松波酒造] 金七聖子さん
(石川県能登町) —— 10
- **有機農業にこだわり続ける”田んぼ屋”**
[桜江オーガニックファーム]
反田孝之さん(島根県江津市桜江町) —— 13

■生涯現役——定年後はふるさとへ

- **トマト栽培農家で自立**
畠中俊夫さん(山口県阿東町) —— 16
- **故郷の巨樹たちと出会う**
[つるぎの達人] 兼西 明さん(徳島県つるぎ町) —— 19
- **資料館を音響と映像の「音のふるさと」に**
安部博良さん夫妻(広島県庄原市口和町) —— 22

■地域資源をビジネスと活力に

- **「いのちの繋ぎ役」としての有機農業を**
山下一穂さん(高知県土佐町) —— 26
- **「秘境杣の里」の再生に奮闘して10年**
轟 亮二さん(福岡県矢部村) —— 30
- **家族で花とハーブ&アロマビジネス**
[プロステージ花壺番] 土井文彦さん
(秋田県男鹿市) —— 33
- **民家や農産物を通じて都市交流**
越後里山活性化の仕掛け人 若井明夫さん
(新潟県十日町市松代) —— 36

INFORMATION —— 39

ふるさとへU・Iターン! 各地の新規就農相談窓口
編集後記/奥付 39

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめる、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。



●表紙写真

左上/管理する山を見回る [わにもっこ] 山内将才さん
 右上/有機ごぼうの収穫で多忙な [桜江オーガニックファーム] の農場
 左下/能登 [松波酒造] の金七聖子さん
 母娘
 右下/古い音響機器を復元して「音のふるさと」にした口和郷土資料館・安部博良さん夫妻
 中央/「杣の里」に自生する山ナシ

▲上/巨樹をガイドする兼西 明さん
 下/新規就農者を指導する山下一穂さん
 ◀左/古民家を再生し、交流の場に、若井明夫さん
 右/スポーツも万能「プロステージ花壺番」土井文彦さん



Uターンしてステツプ・アップ

山を育て森を作り、木にこだわる

「わにもっこ」 山内将才さん (青森県大鰐町 山内将才さん)



都会へ出て学び就職しあわただしい生活が始まる。でもどこか自分の求めるものと違う。そう思った若者は田舎へ戻ってコツコツと自分の足で歩きだした。大地や森の恵み、家族や地域の人の支えで足腰が強くなり納得できる自分がいた。そんな若者たちを取材した。トツプは南津軽のヒバの森を育てながらハンドメイドに徹した木の家具・クラフト作品を製作する「わにもっこ」の山内さん。木の持ち味を最大限に生かす家具職人をめざす。



山仕事を生業とする早瀬野集落と青森ヒバの山林

**祖父や父が育成してきた
山仕事を引き継いで**

青森県の南部に位置する大鰐町は優れた青森ヒバの産地で、山沿いにある早瀬野集落は古くから林業や製材を生業にしてきた人々が暮らしている。山仕事をしている人が今でも20班程あり、その管理をしているのが山内家。山内将才さん(38)は、祖父や父親から引き継いで森の管理育成をしながら、木の生まれや個性にとことんこだわった木工家具を作っている。「わにもっこ」とは、大鰐町の「わに」と木工の「もっこ」を合成した名前前で、山下さんの父、山内昭光さんが地区の人の木工場にしたと企業組合組織で開設した。

山内将才さんは当初から森林や木工に係る



わにもっこの木工房(右)と迎賓館。山内さんの父親らが手作りした

仕事をめざしたわけではなかった。東京の大学経済学部に入学したが、4年の時中退して仙台市へ。会社勤めをしようと企業に内定したそんな時、父親が倒れたという知らせが入った。

「東京と仙台で5年間ほど暮らしました。家に帰って、親父を病院へ連れて行ったりしながら木工の仕事を勉強しはじめたのです。その頃木工職人が7人いましたので、大勢からいろいろ学びました。親父は絵を描いたり彫りを楽しむ趣味人でしたが、木工の新しい可能性を考え、ハンドメイド家具を作ると共に、機械化して量産できる商品も必要だと考えていました」

早瀬野集落の入口付近にわにもっこの木工房と展示館、そして宿泊や食事、研修等が行われる迎賓館がある。こ

れらを含めて「ひばのくに」と呼ばれ、「国立ひば大学」木工科の学習実習が定期的に開催されている。これらの建物は、山内さんの父親と地域の木工さんたちが地元ヒバやケヤキで手作りのものだそう、丸太や荒々しい太い柱に、木の持つ生命感があふれている。

**木の特性を生かした
シンプルな作品**

展示館には山内さんが製作した木工製品が展



▲棚の中の器は地元の漆職人による伝統工芸品
▼設置場所や使う人の姿勢に合わせて椅子を作るのが好きだと山内さんは言う



▶ハギシを使って木工玩具
▲山内さんと奥さんの愛樹子さん

示されている。テーブル、デスク、椅子、小物入れ、玩具用品など種類は多いが、すべてオリジナルな木工作品。丁寧に組みこんで磨き上げており、デスクと椅子の場合、高さを調整しながら生涯使えるように作られている。「私たちは厳しい自然環境の中で百年、二百年と育った樹を使わせてもらっている。木の





木工玩具の製作をする桜庭さん(左)と山内さん

個性を生かして慎重に有効にいいものを作っていきたいと思います」と山内さんは言う。

木の肌や木目を生かして作られたシンプルな作品で、触ると樹の命や森の風が伝わってくるようである。しかし田舎では調度品は派手な高価なイメージのものをという志向があるようで、シンプルな家具やデスクは敬遠されがち。逆に都市の人に人気が増している。「家具を作るには幾つかの要素があり、技術は最後です。まず木の性格を見極めること。

木の硬さ、柔らかさ、年齢によって違ってくる。ケヤキでも里のケヤキや風の強い場所で育ったものは暴れるので駄目なんです。次が乾燥技術。含水率が高いと家具にはなりませんので徹底的に水分を抜きます。建築材では含水率は18%ですが家具では10%以下。よく軒下に10年置いて自然乾燥したから大丈夫という人がいますが、抜け切れていません。人工乾燥機で入念にします。以前はわにもっこも乾燥施設を持っていましたが、規模を小

さくしたため、いまは秋田県の材木店から家具用の優良材を仕入れています。高価なので製作に失敗は許されません。家具やテーブルで出たハギレは、玩具などに使います。このことも木を最後まで使い切るという意味では大切なことです」と山内さんは静かに語る。

パソコン等のOA機の

デスクは角度を変えるとミニテーブルや収納になる等多目的に使えるように製作している。「道具とは動かして使うものという意識があります。体を使って動かして欲しい、愛着も出てきますから」と山内さん。心地のよい無垢の木で角に丸みを持たせるなど、使う人にやさしい配慮を忘れない。仕上げは一般に、使うに従い色艶のする「ナチュラル仕上げ」だが、拭き漆等も人気。

奥さんの愛樹子さんは栃木県足利市出身。

東京で将才さんと知り合って結婚し青森に来た。わにもっこの事務をしながら玩具やクラフト製品のデザインやアイデアを提供して将才さんを支えている。二人には楓唄君という7歳の子供がおり、「子供に使わせたい木工品を考えるといろいろアイデアが出てきます」と言う。「MEGOKKO(めごっこ)」というクマやネコ、ウサギ等動物の顔を背板にした楽しいテーブル兼用の椅子は、愛樹子さんの発想で生まれた。他に木の器、カッティングボ

ード、木の時計等、木の優しさとぬくもりに溢れた小物がいろいろあった。

木工職人に徹すということ

木工房で山内さんの片腕として働いているのが桜庭誠太郎さん(26)。わにもっこの社員として弘前市から毎日通勤してくる。

「東京の工芸デザイン会社に勤めたんですが、なんとなくなじめず9カ月でUターンし、4月からここへ勤めました。木工のことはわにもっこで学びました。黙々と木と向き合って仕事をするのがいいですね。作家になるつもりはなく、頼まれた仕事をきちんとすること。次は山へも出かけて樹木のことをもっと学びたいと思います」と言う。木工職人になって7年、研究熱心で山内さんとウマがあうようだ。結婚して1歳の女の子がおり、木工玩具にも興味が出てきた。

取材の日は、山内さんと桜庭さんは東京のデザイナーに依頼された保育園で使う木工玩具の製作に追われていた。小さい木を組み合わせて丁寧に磨き、木の箱に収める。玩具は手間がかかる割には製作費が安いので採算が取れないことも多いが、子供に本物の木にふれてほしいからと二人は熱心に作業する。工房は木屑を燃すストーブが暖かく、よい香りに満ちていた。

わにもっこでは年一回弘前市等で新作木工品の展示発表会を行い、いままで数々の賞を受賞してきた。工房にはデザイナーや建築家もよく訪ねてきて製作依頼をされることもあり、一年以上かかる作品もあるという。同所では「ひば大学」が月二回開催され、



▶訪ねてきた人がみなテーブルにサインしていく。
▼迎賓館名物の人気の定食



▼迎賓館を運営する山内まつゑさん。丸太を組み合わせた館内は魅力的



現在20代から80代までの10数人が木工を学んでいる。年数回、子供を対象にした木工体験教室も開催している。

隣接する迎賓館食堂のテーブルには卒業生や来館した人たちが彫りこんでいったサインが無数にあった。迎賓館は山内さんの母親のまつゑさんが運営するレストラン&宿泊施設で、地域の人の交流の場にもなっている。昼食にいただいた地元産の山菜料理とイワナ付きセット(千円)が大変美味であった。

壁には故人となったご主人の油絵が掛けてあった。馬に材木を曳かせて山から下りる様子を描いた秀作で、「森の住人」を自認した父親とそれを受け継ぐ家族や地区の人々の想いが、この食事処にはある。ここでは雪の多い2月に、地域の人たちが総出で『雪の大食卓会』を開催する。毎年数百人が各地から訪れるイベントで、山の幸を食べて地酒を飲んで語り明かすのだという。

豊かな混合林の保護育成

山内さんが管理する森へ案内してくれた。早瀬野地区のすぐ裏手に広がる150ヘクタールの森で、青森ヒバの南限、秋田ヒバの北限に当たるため多様な混合林になっていると言う。ゲートを開けて入って行くと間もなく見事なヒバ林帯となり、山の神を祀った祠があった。歩いて約30分ほどのところにはブナやセンの原生林もある。

この山は、山内家が森の管理全体を受託し、地区の人たちに森林作業費を支払う方式になっている。山内家と地区の責任者らで毎年間伐や植林等の森林作業計画を策定し、それに

管理する杉、ヒバ林を見上げる山内さん。年数回山の神を祀った祠に皆で詣でる



基づいて作業をする。間伐した樹は出来るだけ運び出して建築用に活用している。

ゲートの鍵は山内さん親子だけが所有、「本当は開けておきたいのですが、ゴミの不当投棄がありますので」と山内さん。

森ではオオルリ等が鳴き、沢にはイワナが生息、貴重な植物や昆虫も多く、森へ来るといつも新しい発見があると山内さんは言う。昨年は奥地へ足を延ばしてクマにも出会ったので、これからは仲間を誘うと言っていた。

文/浅井登美子 写真/小林恵

●わにもっこ ☎0172-48-5526
<http://www.wanimokko.jp>
●ひばのくに迎賓館 ☎0172-48-5876



インターネットで輪島の食材を紹介する安原さん

能登半島地震を機にUターンした安原さんは、活気のなくなっている故郷の街に危機感を持ち、大手通信会社を辞めて輪島市に戻り、輪島のグルメな食材を朝市さながらにインターネットで販売する会社を興した。ふるさとの豊かな食材と伝統的な食文化に改めて感動し、輪島を知ってほしい、遊びに来てほしいと訴えている。

能登半島地震の災害救援に

能登半島地震は2年前、平成18年3月25日午前9時41分に輪島市沖40キロの海底で発生、最大震度6強を記録した。安原信治さんの実家がある輪島市門前町は最も強い揺れを観測し、道路の崩落、家屋の倒壊が多かった。

■Uターンしてステップアップ——② 「輪食」安原信治さん（石川県輪島市）

災害を契機に、輪島の食文化と向き合う

「大阪の会社で地震のことを知り、仕事を切り上げて昼前に出たのですが、列車は動かない、輪島にやっと着いても門前町までの道路が寸断しているわけで、家へ着いたのは深夜でした。凄かった、ありえないほど凄かった。我が家は半損壊で幸い両親は無事でしたが、数日間は大事な男手として崩壊した地域の家や扉などの整理を手伝い、その後も会社を一週間休んで復旧作業に当たりました。二回目に二週間休んで救援活動をした時、会社を辞めて輪島に帰ろうと決めたんです」と安原さんは当時を振り返る。

パソコンにはその時撮影した地震の被害の生々しい様子が多数収められていた。

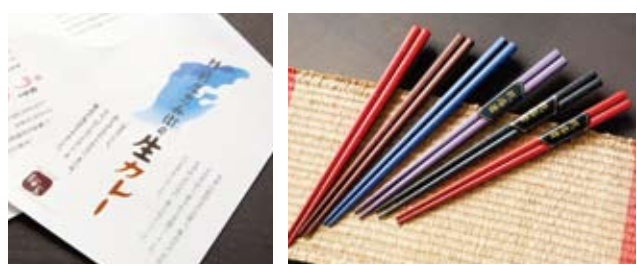
安原信治さん（33）は、高校卒業と同時に大阪の大学に進学、卒業後は一部上場の大手通信会社に就職した。福岡↓東京↓名古屋↓大阪↓東京と国内各地を目まぐるしく出張する日々だった。いつしかパソコンも移動する列車のなかで使うほど大ベテランになっていたため、その後のネットによるビジネス立ち上げに役立った。

ふるさとへ戻ろうと決意した理由は、地震の後片付けをしながら、街に若者が少なく活気がないことだった。安原さんはホームページで「田舎が厭だった。都会で華やかに暮らしたい。地元への帰郷は数える程だった。し

かし帰ってくると10年経つのに何も変わらないう。ほっとすると同時に、この街はどうなってしまうんだろう。訪ねてきた人は素晴らしくと絶賛していくのに、このままでは能登の食文化や伝統文化が消滅していくのではないかと危機感を抱いた」と記している。

地域の美味しい食物50品目

安原さんが開設した事務所は輪島市内の繁華街に近いビルの3階にある。広いスペースにコンピュータ機器が5、6台並び、安原さんは画面に向かいながら入ってくる電話の応対も手際よくこなす。



「輪食」が販売している商品の一例。上/お試しセット。これだけ網羅して2800円。下/豚肉・野菜等具たっぷりの生カレー、ネーム入りで提供する輪島乾漆箸(持ちやすく滑りにくい)



門前町で、安原さん

会社名は「輪食」(washoku)。能登、輪島の名産品や食品を通販で販売する会社で、インターネットを開けると、動く画像の中に、washoku立ち上げの経緯やコンセプト等が明確に書かれている。そして輪島を代表する干物やわかめ、七面鳥の肉、塩辛等をセットにした「お試しセット」(2800円)をはじめ、「輪島づくし」、いしり(魚醬)、ゆべし、塩辛、鮮魚等が紹介されている。「地震の被害が大きかった門前町の干物を紹介したいと始めたのですが、ふぐ、えい、鯛、いか等、干物だけでかなりあり、とても美味しいんです。これらを市民が朝市で買うのと同程度の値段で提供したい。漁師さんや加工品店等を歩いて説明して協力を頼み、そこからまた新しいアイデアが生まれています。注文をもらってから、調理調達するため、発送までに時間のかかるものが多いですが、購入した人には好評です。能登のお米は人気があつてすぐなくなつてしまいました。ゆべしは能登自慢の銘菓で、毎週のように注文してくる女性もいます」



地震の災害復旧が進み、商店もほぼ再開した門前町商店街

商品はネット販売だが、安原さんは「顔の見える関係」が大切だと、毎日各所に営業に出かけている。ふるさとを出た知人には、田舎からの便りのつもりでアクセスもする。最近では、自分が子どもの頃から大好きだった門前屋忠兵衛のカレーを「生カレー」とデザインを刷新して売り出したり、一般の人が高級だと敬遠しがちな輪島塗の箸を、ネーム入りで手頃な価格で提供するなどアイデアマンとしても優れており、10品目ではじめての商品が今では50品目になった。

街並みを保存して魅力ある観光地に

輪島市を車で走ると、街は整備されて美しくなり、表通りには地震の傷あとは感じられない。中心商店街は古い民家や木造家屋を活かして看板や照明、歩道が整備され、以前よりも観光地らしいたずまい。名物の朝市の一角も華やいだ快適広場になり、一段と賑わっている。地震は甚大な被害を与えたが、これを機に問題意識を共有し協力しあう体制が生まれた。地震を逆手にとつて建物の外観を統一、魅力ある地域づくりに各自が真剣に取り組み、県や市が積極的にサポートしている。中でも震災で7割の店舗が全半壊した門前町の総持寺通り商店街の復旧ぶりは早く、すべての店舗が再開へこぎつけたという。門前町は輪島市中心街から車で約30分ほど走った日本海側にある。町を象徴する曹洞宗大本山総持寺は1321年に創建され、加賀藩主前田利家、地元角海家らによって支援されてきた。北前船は全国の末寺関係者や物資を乗せてこの浜に着き、門前町には総持寺御用の職人や商人が軒を並べていたという。明治維新を境にその勢力は削減され、また明治31年の大火で本山は横浜市鶴見に移り、ここは別院となつたが、地元の人々の努力で建物も庭園も見事に復興して祖院となり、禅の寺として雲水たちの修行が行われている。地震では寺院の屋根が一部崩落、入口に参拝者に瓦代の寄付を求める看板があつた。



上/総持寺祖院の山門
下/見事な庭園と大祖堂

総持寺と隣接する高校で学んだ安原さんは剣道4段。落ち着いたら子供たちに剣道を教えることと、門前町の魚介類や寺町ならではの食文化、伝統工芸品を集めて「昼市」を開催したいと思っている。商店街は地震の前から街並みづくりを推進していたため、地震のあとの再建に地域と行政が一体となつて取り組んでいる。能登の魅力の一つにぜひ加えたい町である。

文/浅井登美子 写真/満田美樹

●輪食 ☎0120-430-049
<http://www.wa-shoku.net>



店に立つ聖子さん。「利き酒をしてほしいので、お車以外のお客様に積極的にお勧めしています」

女性感性をお酒や地域に生かして

■Uターンしてステップアップ——③

「松波酒造」金七聖子さん（石川県能登町）

大学を出たあとと金沢の大手酒造所で修業した金七聖子さんが実家の酒造店に戻った。「女三人姉妹の長女だから私が跡取りとして頑張る」と聖子さんが言えば、「他にいい就職先がなかったんだろ」と父親は茶化しながらも嬉しそう。「若女将の酒楽日記」というウェブを立ち上げ、日本酒と能登料理、地域の銘菓やイベント等を紹介、能登観光にも貢献している。

140年の歴史を持つ奥能登の酒造所

能登町は輪島市と反対の能登半島の東岸にあり、能登杜氏発祥の地だといわれる。能登の気候で育った米で寒い冬に仕込んだ酒は、漁師ら地域の人たちから海の幸に合う日本酒として愛されてきた。各社が守り続けてきた古い道具と蔵、井戸水を使って、昔ながらの

手作業で酒造している。

冬の厳しい自然風土の中で能登杜氏の技と心意気で酒造りをする地酒蔵は、現在輪島市、珠洲市、能登町に11社あり、これを纏める鳳珠酒造組合では「奥能登酒蔵めぐり」としてスタンプラリーを企画運営してきた。

松波酒造は明治元年（1868）に創業した歴史のある酒造所で、旧内浦町の商店街にある。江戸時代末期の頃金七氏が創業し、京都の「大江山」伝説から命名した「大江山」という地酒を主体に造り続けてきた。現在の経営者金七政彦氏で6代目、娘の聖子さんが継承すると7代目、140年の歴史を担うことになる。

古くて大きな酒蔵と住まい、売店、倉庫等を併設した建物は商店街のシンボリック存在だが、派手さはなく漁師町のたたずまいに溶け込んでいる。毎年正月に当主が作って吊るすという杉玉と「大江山」と染め抜いた暖簾のあるガラス戸を開けると、「いらっしやい」と元気な声で金七聖子さん（32）が出迎えてくれた。親しみやすく健康的、笑顔がとても魅力的な美人である。

聖子さんはブログで「若女将の酒楽日記」と記して、酒造情報や地域のイベント等を紹介しているが、若女将・聖子さんは花も蕾

古い佇まいが貴重な酒蔵(左)と代表的な日本酒。「大江山」はミニサイズも人気



の独身女性。いまは店の手伝いや僱事への参加、地域活動で男性と付き合っている暇はなさそうだが、きつと素敵な人に出会い、松波酒造をさらに盛り上げていくことだろう。

蔵人修行を終えて帰宅

金七聖子さんは金沢市の有名な進学高校を出て京都産業大学経営学科へ進学した。大学を出ると、金沢市にある大手酒造メーカーへ就職した。「酒造を最初から学ぼうという意思はなかったんですが、就職希望の会社には合格しなかったため、次に希望した酒造会社に入社したんです。100人以上が働いていて化粧品も開発販売する近代的な酒造会社です。ここで2年間蔵人として働かせてもらい、3年目は経営と事務を学ばせてもらいました。うちは社員2名、パート2名、蔵人3名の小さな酒蔵ですから比較できませんが、とてもいい勉強になりました」

3年間勤務したあと能登町の実家に戻ってきて聖子さんが感じたことは、昔ながらの伝統を頑なに守りながらも、季節やファン要望に応じてさまざまな日本酒を開発している父親や蔵人たちのひたむきな姿だった。酒通の聖子さんが旨いと感じ、地元でも人気のお酒たちだが、外部の人たちにはあまり知られていない。能登町の存在についても知らない都会人が多い。

だったらホームページなどで紹介できないだろうか」と聖子さんは思った。

奥能登の地域情報やPR活動を担って

聖子さんはパソコンでメール等はやってき

たが、魅力的なサイトを開設して能登の各種情報を発信するには専門的な知識が必要になる。そんなとき(財)石川県産業創出支援機構(ISHCO)がウェブショップ作成講座を開催、受講者を募集していることを知り、早速応募した。

家の手伝いをしながらこの教室に2年間通い、自分でホームページを立ち上げた。

「日本酒が好きなの人も飲めない人も楽しめる元気いっぱい若女将が能登の楽しい情報をお届けします」と書かれて聖子さんの笑顔で始まるブログには、能登の祭り、奥能登酒蔵スタンプラリー、廃線となった能登線の近況等の地域情報とセットして、松波酒造の商品も上手に紹介している(10月頃)。

「これによって飛躍的に売り上げが伸びたということはありませんが、当店のPRにはなっていると幸いです」と聖子さんは言う。

さらにパソコン教室に通ったことで、地域活動をしている女性やリーダー、グループと沢山知り合いになり、頼まれて僱事や研修会にも参加するようになった。帰ってきた若い女性経営者として人気が出て、ラジオに出たり、内閣のメールマガジン(前福田首相)に能登の特産品や「能登井」について紹介されるなど、大忙しの日々を送るようになった。

店頭には、聖子さんが酒蔵見学者のために制作した「日本酒が作られるまで」の写真と図面入りのガイドペーパーや新酒のパンフレット等が沢山並んでいる。写真撮影もプロ級で女性の豊かな感性と気くばりが感じられる。なお「能登井」は、金七さんから20人のメンバーがまとめ上げた企画で、石川県出身の料



理家道場六三郎氏の協力を得て、能登の水と米、魚、器等を使った井を出す店を「能登井」として認定するもので、現在奥能登地区に63店舗ある。日夜能登井の普及活動を担ってき聖子さんは、昨年地域活動の功労者に贈ら

▲店先で母親のえり子さんと▲地元の銘菓や聖子さん手作りのパンフレットが並びコーナー

▶柿を栽培する農園で、祖母の千鶴子さん

れる「いしかわTOYP大賞」を受賞した。

「おばあちゃんの味」を大切に

我々が取材にお伺いした10月末頃は、里には柿が実り、店にはキノコなどが並んでいる。松波酒造では自家製の平たね柿を産直販売するほか、「おばあちゃんの干し柿」として秋から冬期間粉のふいた干し柿を販売し、お歳暮用品としても人気がある。このおばあちゃんの味を売り出したのが聖子さん。祖母の千鶴子さん（83）と一緒に、柿の実が熟れる松波農園へ案内してもらった。

丘の上の大地に見事な柿の木畑が広がっている。木は枝を横に伸ばして沢山の実をつけ、よく手入れされていることがわかる。この柿は聖子さんの祖父金七龍太郎さんが雑木林だった土地を昭和45年に購入して開拓したもので、焼酎漬けにしようと柿を植え、ほかに梅や栗の木もある。龍太郎さんは7年前に亡くなったが、地域のお年寄りたちも木の手入れや収穫に長年関わってきた。今も7人ほどが作業を手伝いに日参、千鶴子さんも毎日仲間に見えるからと出かけていく。畑の脇には柿を干しておく作業場もあった。

日本酒の素晴らしさを多くの人に

翌朝は6代目当主金七政彦さんに蔵の中を案内していただいた。古いが堅牢、天井の高い木造の建物で、精米・蒸米の仕込み、もろみ作り等に合わせて、大小の用具がいろいろあり、山の清水を取り込んで作業する土間や用具は磨き上げられて時を待っている。階段を上ると発酵熟成させる昔の木製大桶が並ん



▲6代目当主で聖子さんの父、金七政彦さんと仕込み蔵
◀酒蔵所。今は使っていないが、薪を焚いた頃のエントツが残っている

でいる。日本酒の仕込みは寒中に行うため、いまはまだ休眠中だったが、蔵には百年以上日本酒を造り続けてきた菌たちが宿っているようだ。もろみ作りの超特大ホーロー、使い込んできた釜や踏み台などにも、歴史の深さと蔵人や杜氏の心意気を感じられる。

「蔵の温度が3〜5度の頃に仕込みははじめますが、発酵させるためにマイナスにはならないように室温管理することが大切です。米は県内で取れた五百万石を使っていますから美味い酒ができますよ」と政彦さんは言う。

娘の聖子さんのことを聞くと、「どうってことないですよ。希望する会社に入れなかったから帰ってきたんじゃないの」と茶化しながらも「ゆつくり学んでもらいます」と嬉しそう。

母親のえり子さんは「最近では酒造の営業よりも地域おこしのボランティアの方が忙しくて、少し疲労気味です。婿さんには公務員のような人がいいかしら、酒造の仕事を手伝わせるのは可哀想だから」と言っていて、アハハと笑う。妹の一人は結婚して珠洲市におり孫もいるそうで、「聖子のことは全然気にしませ

ん」。さっぱりして快活なお母さんだ。

酒ファンは日本酒に始まり日本酒に終わるといわれるが、聖子さんは日本酒の現状について「コンビニに行くと比較的安く買えるワンカップがあり、中高年男性のイメージ。若者や女性の日本酒離れが感じられますので、

当店では小瓶に入ったお洒落で可愛い大江山を作り、道の駅に置いてもらっています。正月前後に発売する数椿の花と能登照葉という純米酒のコラボレーションも話題となり、夏は深層水で仕込んだ優しい味わいの「花つづら」、秋は数量限定の「冷おろし」が女性にも好評です」と言う。

年が明けると、いよいよ蔵は寒仕込みと醸造で多忙となり、しぼりたてのにごり酒や生酒が登場する。文／浅井登美子 写真／満田美樹



●松波酒造(株) ☎0768-72-0005
http://www.o-eyama.com

有機農業にこだわり続ける、田んぼ屋

「桜江オーガニックファーム」反田孝之さん（島根県江津市桜江町）

一度は親の建設業を手伝おうとUターンしたが、「農業をやりたい」と再び家を出て、農家で6年間修業した反田青年は、帰郷すると江の川のほとりで有機農業を始めた。自称「田んぼ屋」。「有機農業にこだわってこだわって、米や大豆、ごぼうを作っとります」という。農業経営をはじめ5年、有機農業JASの認定を受けたファームの農産物は安全で美味しいと評判だが、天候等に左右される仕事、闘いはまだまだ続く。

収穫期で忙しくごぼう畑へ

朝9時、朝霧を立てながら滔々と流れる江の川に沿いながら国道を南下していくと旧桜江町大貫地区に入った。江の川の橋を渡ると広々とした畑が広がり、遠くの方で何人かが働いている。車で反田さんのお母さんの康子さんが迎えに来てくれた。

ごぼうはまだ青々とした大きな葉をつけ、



ごぼうを掘削機で掘り起こしていく反田孝之さん



中国地方を代表する江の川（上）とその河川敷に広がる桜江オーガニックファームの田畑

土の下にしつかり根を張っている。ごぼう専用の掘削機を稼働していた反田孝之さん（36）がエンジンを止めて現れた。「少し待ってくださいませか」と言って、再び掘削機に乗り、畝を二、三回まわる。普通1メートル以上あるごぼうはとても人手では掘れないため専用の機械で傷つけないよう土ごと深く掘り起こすのだが、「昨日までは凄くいいごぼうが採れたのに、今日のは駄目だ。小さくてヤケが入っている」と反田さんの顔が曇った。

確かに小ぶりでバラツキがあるが、素人目には美味しそうな一級品。後で保冷库で保存していた昨日収穫したというごぼうを見せてもらったが、1.5メートルもある容姿の美しいごぼうで、特有の香りにあふれている。桜江オーガニックファームのごぼうは、柔らかくてアクが少なく甘いと好評で、首都圏の紀伊国屋にも出荷していると言う。

▶ごぼうを収穫する孝之さん
▼反田組代表取締役で孝之さんのよき理解者、反田忠士さん、康子さん(事務所前で)



同じ畑でなぜ不良品が出たのか、その理由を聞くことなく、その日の作業は終了となった。多分反田さんはその原因を徹底的に分析したことだろう。収穫は、毎日午前中二、三時間の作業と決めているようで、雇っている近所の農家の夫婦も引き上げていった。

アウトドア系青年の熱意を両親も支援

反田孝之さんは東京農工大学森林学科を卒業、造園会社に就職したが、訳あって父親の経営する(有)反田組を手伝おうと半年程で退社して帰郷する。反田組は孝之さんの祖父が始めた会社で、中国地方の建設関係の仕事を手広く行ってきた。孝之さんは次男、長男は広島の実業に就職しているの、両親は孝之さんに期待した。

しかし自分のやりたい仕事ではない、学生時代から山仕事や農家の野良作業によく出かけていた孝之さんがめざした仕事は農業。農業も化学肥料も全く使わない有機農業だった。有機農業を学ぶために再び家を出た孝之さんは、まず岡山県にある農家で一年間、さらに千葉県で自ら土地を借り5年間自己研修をした。千葉では実際に自分で有機野菜を栽培してみることが必要だと、田畑を借りて土づくりに学んだ。その時、農家の人たちが温かく迎えて指導してくれたことから、反田さんも現在、新規就農を希望する若者たちを積極的に受け入れている。

大学時代を入れて約10年、日焼けして遅しなくなった孝之さんはUターンして、早速営農に取り組む。平成16年、父親が経営する反田組農業部として開業した。農業特区の指定を受け、江の川沿いの休耕地や田畑を借り受けた。農業に欠かせない機械は研修先の農家がアドバイスしてくれた。

父親の反田忠士さん(63)は、「息子が有機農業を本格的にやりたいと言った時、私たちは反対しませんでした。建設業は年々厳しく

なっています。休耕地の復旧作業は私の方がプロ、機械導入では半分助成してきました」
また母親の康子さんは、「私たちも野良仕事が好きなので、農繁期にはよく手伝います。あの子はアウトドア系で、野山で遊んだり旅をするのが好きでした。大学を出たら公務員かサラリーマンになってほしいと思ったので



◀大麦若葉を見回る孝之さん ▲豊作の大豆



茎(すいぎ)を取るために栽培する里芋と郷土食品の「赤すいぎ漬」

すが、組織の中で働くより、自分で何かするのが好きなんです」と語る。

桜江町で働いていた在帰子(あきこ)さん(28)と結婚、「農業が好きでよく手伝ってくれるともいいお嫁さんです」と康子さんが褒める。私たちが取材に行った日は、病院へ検診に出かけていたため在帰子さんには会えなかったが、12月28日に元気な男の子を出産、丈土君(たけと)と名付けたという。

江の川沿いを肥沃な農業大地に

「桜江オーガニックファーム」(反田組農業部)は、従業員3名、常時2、3名のパートを使い、水田4ヘクタール、畑12ヘクタールを耕作している。「江の川は氾濫してどべを置いていきます。山のミネラルが豊富ですが鉄分も多く、子供の頃は磁石で鉄を取って遊びました」。農地は全てを借地代を払って借り、水は江の川の水をポンプアップして使っている。休耕していた土地を有機質な肥沃な土壌にするための労力は大変だった。現在も大豆を作った翌年は水田にしたり、畑を休ませて牧草をまく等の土づくりに特に力を入れている。

ごぼう畑の脇には里芋畑がある。この里芋は芋ではなく茎を取るための品種で、塩に漬けたら赤い色は桜江名物として市販される。素朴な味わいと歯ごたえ、薄紅色で酸味があり、地域の伝統食品の一つだという。

その先には「大麦若葉」の畑が広がっている。いま人気の健康食品「青葉汁」となる作物で、背丈40〜50センチ頃に収穫して出荷するそうだが、一つでも雑草が入っていると不合格。畑を点検していた反田さんは5センチ

ほどに育った麦の中に雑草が生えだしたのを発見した。

「二反歩作っても10万円程度にしかならないので、人手をかけては採算が合わない。30分で草取りをするためには田植機などに熊手をつけて土をおこす、これを数回やるしかないですね」とつぶやく。

一方、水田を転作して育てた大豆は、はちきれそうな実をつけて収穫期を迎えている。「今年は豊作ですね」と反田さんに笑顔が戻った。大豆の収穫は委託しなければならぬ。収穫機を購入すれば、一千万円すると聞いてびっくり。大半を有機味噌の製造所に届けている。

農家や地域が発展していくために

桜江オーガニックファームは、一昨年までJAが使っていた農産物加工所を購入した。保冷庫等の設備が完備した施設で、収穫が集まる農産物を低温で保存し、調整しながら出荷できる。保冷庫には見事なごぼうが保管され、他の農家のごぼうも預かっていた。

手際よく泥を取り除く作業をする増野哲也さん(28)は同ファームに2年前から住み込みで研修をしている。萩市出身、鹿児島大学工学部を出て企業に勤めたが、反田さんの下で有機農業をしたいとやってきた。「有機農業の大変さがよく解ります。直接販売や加工など付加価値をつけないと食べていけませんね」実家は農業をしていないので、できればここで働いて加工等にも関わっていききたいと言っていた。

反田孝之さんは、今後は有機農産物の生産



▲保冷施設の完備した農産物加工所
▼研修生の増野哲也さん



収穫した見事な有機ごぼう(上)と、洗った後水きりをする収納庫



と共に、加工・販売までを行う六次産業を現実したいと考えており、「地域の生産者が潤う産業として成立すれば、雇用創出、後継者問題の解決にもなります。そのためにもさらに安全な土地を広げていきます」と語り、トラックに乗ってあわただしく畑に戻って行った。

文/浅井登美子 写真/小林恵

●(有)反田組農業部
「桜江オーガニックファーム」
☎0855-93-0466(携帯転送)

生涯現役—定年後はふるさとへ

トマト栽培農家で自立

畠中俊夫さん

(山口県阿東町)

定年後はふるさとへ帰って、家庭菜園や趣味を楽しみながら暮らしたいと思っても、現実的には家族や住居の問題でUターンに踏み切れない人が多い。そんな中で、畠中さんは定年5年前に実家に戻り、トレーナー農家で一年間農業技術を学んで、トマト栽培農家として自立した。田舎では6代はまだヒヨコ、これからは本番と、生涯現役、農家をめざして頑張っている。



■ S L が走る田園地帯

紅葉が美しい山間部を国道9号、JR山口線、篠目川が平行して走る。目印の阿東町篠目地区には道の駅があり、昼食にきた人々で賑わい、売店では山口特産の梨、りんご、みかん、栗等を求める人で賑わっている。その手前の道を右手に入って登っていくと、静かな田園地帯の集落になり、ほどこなく畠中さんの家があった。お大師さまを祀った民家と並んで真新しい木造住宅が建ち、左手の畑にはハウス群が広がっている。

眩しいほどの秋日和のなかで畑中さんの両親が収穫した大豆、小豆、いんげん豆を広げて天日干ししている。

畠中俊夫さん(61)、正子さん(56)が出迎えてくれ、「どうぞ」と新居に通された。ヒノキの香りにあふれた純和風家屋で、調度品のセンスも見事だ。

「帰郷した翌年に台風がこの地方を直撃し、屋根の一部が破損してしまっただけです。そのため思い切って新築したんですが、親たちは住み慣れた古い家がいいといっただけに住んでいます」と俊夫さんは言う。

居間からは田んぼや畑の先に、土日になると煙をはいて走る山口線のS Lが見えるそう。国道と篠目川の先には紅葉のはじまった広葉樹の森が見える。

「ここは海拔300メートルほどあり、小さい田んぼが多いのですが、お米の美味しいところ。でも周辺の森は、私が育った頃よりもっと紅葉が鮮やかで凄かったという印象があります。山の手入れが行き届かないので竹

が繁殖したり、気候が変化しているのでしょう。温暖化はトマトの栽培にも確実に影響していますね」

早速隣接するトマトのハウスへ案内してもらった。計画ではトマトの収穫は7月から11月いっぱい予定だったが、今年は猛暑がいつまでも続き、収穫を一か月近く早く切り上げるようになったという。

■ 第二の人生は農業を職業とする

畠中さんが栽培しているトマトは「山口あぶトマト」という産地ブランドの美味しくて安全・安心のエコ・トマト。冬場に土づくりをしつかり行い、栽培中はできるだけ農薬や化学肥料を使わない。現在畠中さんが栽培するトマトのハウスは11棟、2反歩を超える。12段階に分けて栽培、収穫しているが、その

年の気候に影響されやすい。ハウスは初夏以降はビニールをはずして野外と同じ環境にしているが、今年は猛暑で成熟が早まり、すでに幹や葉はかなりぐったりしている。

「7月から出荷しはじめ、多い日は590kg 60ケースを収穫しました」

農家出身とはいえ農業経験が皆無だった畠中さんが、新規就農5年目にしてここまで大規模に営農するとは凄い。

「15歳の時高校へ行くために家を出て、45年間サラリーマン生活をしてきたわけですが、いざは農業をしたいと思いますでしたが、定年後では遅すぎると考え、平成15年3月、55歳で退職して実家に戻り、夫婦で町のふるさと振興公社に相談に行き、4月からトレーナー農家(農業指導士)西村さんの圃場に通って一年間研修を受けました。西村さんから、農



▲農業ひと筋、3人の息子を育てた畠中茂、イクヨさん



▲畠中さんがウターンして新築した家とハウス群。収穫した「山口あぶトマト」





健康で農業を楽しむ両親と俊夫さん、正子さん

して広島市と岡山市で暮らしている。

正子さんは同じ山口県の山口市の出身。「主人が定年後に農業をやることには私も賛成でした。きちんとやっつけていくためには家族の支えが必要なので、一緒に研修したわけです」フットワークよくきびきび働く姿を見て、ご主人の片腕になっていることを確信した。

■働く親の後ろ姿を見ていた

畠中俊夫さんは男3人兄弟の長男。3人の息子を育て上げた母親のイクヨさん(87)は、大豆の手入れをしながら「あの子は中学を出ると高校へ行くために家を出たので農業の経験はほとんどなく、農機具の名前も知らなかったですよ。それが帰ってきて農業で食べていくと言いついて——」と笑いながら言う。

父親の茂さん(89)夫婦は、田んぼや畑をやりながら、牛や鶏を飼育して3人の息子を学校へ行かせた。「ジャム用にするイチゴも20年間栽培しましたよ。一粒一粒ヘタを取って出荷するので手間がかかりました」と茂さんは言う。

長男の俊夫さんは、親たちの苦勞する後姿と同時に、夫婦仲良く健康で農業一筋に悠然と生きてきた姿を見て、親と一緒に暮らして農業をやることを当然として受け止めてきたのだろう。「農業をやることは親にすりこまれたんですよ」と苦笑する。

二人の弟たちは大阪と山口で暮らしているが、以前にも増して時々実家を訪ねるとい

■忙しいけれど気分は最高

1年間トレーナー農家で研修した畠中さん



家の軒下には「お大師さま」、庭先には観音像を建て、豊作と家族の健康を祈願している

は、翌年にはハウスを7棟に増やし、さらに4棟を増設して本格的にトマト栽培をはじめた。ヤマザキで蓄積した建築技術を生かして、少しでも経費を安くしたいと自分で組み立てたという。しかし9月にいきなり台風18号が襲来、ハウスのビニールは無残に破損、3棟は倒壊して収穫不能になってしまった。また翌年は、長い梅雨で予定していた収穫の3割しか収穫出来なかった。

「しかし技術習得には最低3年は必要と考えていましたので、悪いことを早めに体験してよかったです」と前向きだ。そして「サラリーマンは楽です、農家には土日の休みもありませんから。でもマイペースでやられて、気分的には最高です」

トマトのあとは小松菜を植えて年明けの2月頃から出荷する予定で、その他にもいろいろな作物に挑戦していきたいと夢はふくらむ。

山口県は新規就農者のための支援制度も手厚く、阿東町には農業青年を多数受け入れ、酪農と畜産加工製品の製造販売、農業の代行を手広く行っている「船形農場」などもある。地域の人々の畠中さん夫妻への期待も大きいようで、早晚地域活動にも引っ張り出されることだろう。

文/浅井登美子 写真/小林恵

●就農についての問い合わせは、やまぐち農林振興公社
☎083-924-8900

故郷の巨樹たちと出会う

「つるぎの達人」兼西明さん（徳島県つるぎ町）

世界を歩いてきた企業戦士が定年を迎えた時、その先に描いたものは、ゆったりと気ままに日々を楽しむ老後の暮らしだった。「のんびりしよう」と、帰ってきた40年振りの故郷。何も変わらぬかに見えたその故郷は、地域再生に取り組む人々の、熱い活気に溢れていた。



「故郷の巨樹を沢山の人に紹介したい」と兼西さん

平成16年、定年退職を迎えた兼西明さん（63）は、40年間をプラント設計一筋に歩んできたエンジニアだった。ケミカル産業設備の設計から施工まで、エンジニアリングのプロとして、高度成長期の真っ只中を生きてきた。

仕事は国内にとどまらず、アメリカ、イタリア、旧ソ連、韓国、シンガポールなど、世界各国へ広がり、兼西さんはそれらの国々へ故郷徳島県を出て以来、永年住み慣れた大阪茨木市の自宅では、単身赴任の夫の留守を妻の三枝代さん（56）が守り続けてくれた。定年後には妻と故郷へ帰り、ゴルフでもしてのんびり暮らそう。漠然と描いていた老後の夢を叶えるべく、兼西さん夫妻は定年を機に故郷徳島へのUターンを決めた。

単身で赴任した。スーパードバイザーとして、プラントの企画・設計から、建設工事、試運転まで、ひとつの仕事を請け負うと、最短でも10カ月に及ぶ外国暮らしが待っていた。

■霊峰の麓に開けた町

四国の屋根と呼ばれる剣山山系。その主峰、剣山は山岳信仰の霊場として古くから知られ、多くの修験者たちが訪れた。徳島県つるぎ町はこの山の麓に開けた町で、平成16年に美馬郡の2町1村が合併して誕生した。町の北には吉野川が流れ、川から剣山に向かって、町を貫くように国道が延びている。

吉野川に近い、兼西さんの生家のある半田地区は阿波徳島の特産品「半田そうめん」の産地として、250年の歴史を持つ町だ。その半田地区から剣山に向かって国道を走ると、途中、一字のトンネル脇に「巨樹王国・一字」と書かれた大きな看板が目に入る。国道の側面には山が迫り、連続するカーブの道



▶樹齢800年。巨樹の里を代表する赤羽根大師の大エノキ
◀訪れる人を、隣のお堂で接待する近在のお年寄りたち。古木への畏敬の念が伝わってくる





は、「巨樹の里」にふさわしい地形の歴史が感じられる。

つるぎ町一宇地区には88本にも及ぶ巨樹が存在するという。ちなみに環境省の定める巨樹の定義は、地上から1.3メートルの高さの幹周りが、3メートル以上の樹木を指す。こんな大木が一宇地区だけで88本も存在するというのだから、凄い。町はこの巨樹を多くの人に知ってもらおうと、巨樹と歴史の景観を生かした町づくり・地域の再生に取り組み始めた。

■町の案内人「つるぎの達人」

取材の朝、宿泊先の宿で兼西さんとつるぎ町役場の大島理仁さんに合流した。帰郷から3年、地域にすっかり溶け込んだ印象の兼西さん。同行の大島さんは地域開発の推進や、地域力の創造、イベントの企画などに取り組むつるぎ町役場地域創造課の若手ホープだ。

地域創造課では町に残されたこれだけ多様な巨樹が、人々に十分に認知されていない状況を考え、平成18年に開催された「国民文化祭・徳島」で「巨樹の写真展」巨樹を訪ねる

ツアー」を実施した。これが思わぬ反響を呼んだ。国民文化祭は昭和61年に第一回大会が開かれ、以後毎年各県で行われる国内最大の文化祭だ。つるぎ町での開催テーマは「剣山山系の暮らしと文化」。作家立松和平氏の講演などもあり、県内外から大勢の人が訪れる大会となった。

「巨樹を実寸大で見せる工夫をした写真展や巨樹の探訪ツアーは、お陰さまで大変好評でした」と、知名度を上げた「巨樹の里つるぎ町」だが、成功を支えた要因のひとつにボランティアガイドの存在があった。文化祭に向け、巨樹や歴史の町並みなどのツアー案内役として、町はボランティアを募り育成。認定試験をパスした33名が「つるぎの達人」として誕生した。

■推定樹齢800年、巨樹の王様

大阪から40年振りにUターンした兼西さんも、認定試験をパスし、「つるぎの達人」として活躍するひとりとなった。

「戻った当初は昔と変わらない故郷にホッとしたというか、言い換えれば過疎化による寂しさのようなものを感じました。しかしもう一歩踏み込んでみると、町は大きく変わっていたのです」

地域再生への取り組みに動き出していた町は、「国民文化祭・徳島」の開催へ向けて、さまざまな試みを始めていた。

自分の住む故郷のことをもう一度、勉強してみよう。そんな時、町が「つるぎの達人」を募集していることを知らされた。すぐに応募、改めて学ぶ故郷の山や見事な巨樹、歴史



▶天に向かってまっすぐに伸びていくモミの木。幹を覆う深い緑の苔にも遥かな年月が感じられる。
▼モミの木の根元に祀られた小さな祠。地域の人々の篤い信仰心がうかがわれる。



▶一宇地区最奥の集落桑平を歩く兼西さん。後ろには四国第一位のトチノキ。前夜の雪が、葉を落としたトチノキを際立たせた。

ある町並みの素晴らしさは、知れば知るほど新鮮だったと兼西さんはいう。

兼西さん、大島さんとその日向かったのは、数ある巨樹の中でもひとときわ大きいという「赤羽根大師の大エノキ」。剣山まで続く国道は民家の軒をかすめ、やがて山道へと入っていく。古道といった趣きの険しい道だ。昨夜の雪が残る道、しかも連続するカーブ。大島さんの運転テクニクに目をみはる。

車の止まった先に「赤羽根大師」の小さな社殿があり、その奥に大エノキの驚くような



▶剣山麓の手打ちうどんの店「田舎で暮らそうよ」店主の葛籠さんと大島さん(左)

姿が現れた。樹高16メートル、幹周り8・7メートル。推定樹齢はおよそ800年。国指定の天然記念物として日本一に認定された巨樹の中の王様だ。800年を生きてきた根はどっしりと大地にめぐらされ、そこから太古の生き物のような幹が天に向かって、四方に向かつて枝を広げる。声を掛ければ、応えてくれそうな、圧倒的な存在感だ。

小さな社には近在の老人たちが集まり、お大師様を訪れる人々の接待を欠かさない。地域の人々の畏敬の念が、800年のいのちに向けられていることを感じる光景だった。

その後は樹高30メートルという白山神社のモミの木へ向かった。落ち葉と雪の急斜面を登っていくと、遙か頭上に伸びたモミの木が見えてきた。推定樹齢400年、幹を覆う深い緑の苔が神秘的なほどに美しい。

次に目指すは一宇地区最南部の集落桑平に聳えるトチノキだ。落葉した森の中に昨夜の雪がうつつすらと積もり、山は不思議な明るさを湛えていた。兼西さんは終始我々の覚束ない足元を気遣いながら、巨樹にまつわる興味深い話や、ツアーでの体験談などを、息も切らさずに話してくれる。「つるぎの達人」の見事なホスピタリティー精神が伝わってくる。やがて急峻な斜面の先に、すつきりと葉を落とした大トチノキの全貌が現れた。幹周り8・5メートル、樹高28メートル。県の天然記念物に指定されている四国一のトチノキだ。自由奔放に自然のままに生きた姿で、集落を見守り続けてきたのだろう。根元近くに祀られた小さな祠が、印象的だった。

一日では訪ねきれないほど、多様な巨樹が

存在するつるぎ町だが、改めて思うのは、それらを生かしてきた自然の豊かさと、林業に支えられてきたこの町の、樹木に対する人々の篤い信仰心だった。

麓に下る途中で、「田舎に暮らそうよ」という面白い名の手打ちうどんの店に寄った。この店のご主人葛籠孝至さん(41)も、京都・福山からのUターンだという。元来がエコロジ志向だった彼は、「戻るべきところに自然に戻ったのでしょね」と笑う。薪にこだわりのうどんを茹でる竈の薪は、山から不要な木を伐ってきて使う。妻の納子さん(39)、元氣な3人の子供たちとの逞しく大らかな生活だ。竈で茹でたうどんはとびきりの美味しさだった。

■町並みも観光ポイント

兼西さんら「つるぎの達人」が案内するのは、巨樹ばかりではない。江戸時代の家屋が並ぶ「町並みツアー」も、訪れる人が楽しみにしている観光ポイントだ。

つるぎ町貞光地区は葉タバコの産地として江戸時代に栄え、阿波藩でも10指に数えられる豪商を生んだ。その繁栄を誇るかのように造られたのが、町屋の屋根に立つ「うだつ」といわれる防火壁。正面には凝った意匠のこて絵や軒飾りも施され、各家が富を競った。この地区にはこうしたうだつの上がつた商家が400メートルも続き、独特の雰囲気醸しだしている。「うだつが上がらない」とは、この富の象徴となつたうだつに語源があると、兼西さんから教えられた。

県内外から訪れるさまざまな観光客を案内

する兼西さんにとって、何より楽しいのは、「いろいろな土地の人と、人間同士の話ができること」。多忙な仕事人生にはなかつた喜びに、「毎日が充実してますよ」

当初大阪からのUターンに戸惑いを感じていた妻三枝代さんも、いまではすっかりこの地に馴染み、つるぎ町の人となった。

大島さんの所属するつるぎ町役場地域創造課では、国民文化祭に訪れてくれた全国の人々を中心に、町の応援団ともいえる「つるぎクラブ」を結成した。会員は現在500名。季節ごとのツアー事業などにモニター参加してもらい、今後の市場調査等に活かしていく考えだ。「つるぎの達人」もさらに充実させ、やがてはNPO法人として独立展開させていくことも期待されている。

(文)金山淑子 写真/小林恵



防火のために造られたという「うだつ」が特徴の商家織本屋と往時の繁栄が偲ばれる建物内部

●つるぎ町地域創造課 ☎0883-62-3111

資料館を音響と映像の「音のふるさと」に
安部博良さん夫妻（広島県庄原市口和町）

廃校を利用して各種資料や民具を収納していた郷土資料館。管理人（館長）となった安部さんが膨大な収蔵品の中から見つけたのが古い蓄音機。電子技術者だった腕前を発揮して修復し、レコードコンサートを開催するまでにした。同様に昔懐かしいラジオや映写機、録音機等も修理再生、いまでは全国屈指のレトロな音響・映像資料館として来館者も急増、マニアの注目を集めている。

再生した映写機にフィルムをセットする安部さん

■丘の上のサロンの資料館

旧口和町くわちまちの市街地をぬけて豊かな水田地帯を東に向かうと、永田地区の穏やかな丘陵地の上に口和郷土資料館がある。かつては広島県立庄原格致高校口和分校だった建物で、2階建て、10教室程度の小規模な木造校舎。30年ほど前に廃校になり、町では郷土資料館として活用してきた。

出迎えてくれたのは6年前に就任した館長の安部博良さん（65）と奥さんのミヨコさん（60）。草花が咲く手入れの良い館庭と、磨かれた玄関、廊下。山野草の生花やのれん、照明、展示品の粋な配置等から、一瞬にして、ここは安部さん夫妻が手塩にかけて手入れし保全していることが伺える。資料館というより胸ときめくサロンといった雰囲気である。

資料館といっても休眠状況に近く、見学者も少なかった口和郷土資料館。旧口和町が30年来収集してきた農具や臼、養蚕や林業、生産生活民具等は、現在2階の4室に整理されて展示され、一部には囲炉裏のある農家の居間も再現されている。口和は日本海側の松江市と庄原、瀬戸内海側の尾道、または福山を結ぶ交通の要所で、町内を流れる西城川は物資輸送の舟運が盛んだったという。そのため住民から寄せられた資料の中には、大正・昭和初期の貴重な用品や、安部さんが大喜びした古い音響関連用品も含まれていた。

■映像・音響機器の技術者として海外へ

安部博良さんは口和町の出身。ソニーの技

術者として35年間勤め上げ、定年後は口和町で一人暮らしをする母親と暮らすつもりで、定年前から家を新築して帰郷した。

「僕は小さい時から野外で遊ぶよりも、家の中で機械いじりをするのが好きで、小学校の頃には手製でラジオを完成するという、いわゆるラジオ少年だったんです。そのため好きな仕事ができる、ソニーの技術部門に就職しました」

奥さんのミヨコさんは福山市の出身。高校時代からアマチュア無線が趣味という理数系に関心を持つ少女で、二人はアマチュア無線を通して知り合い、交際を育んだ。

結婚後はソニーで、映像や音響機器の技術者として働いていた。ソニー製品が常に話題となり、世界のSONYとして海外へも一躍進出した時期である。安部さんも40代からは海外へ技術指導に行く機会が多くなった。

「旧ソ連、フィリピン、中国、クエー
ト等へ転勤となり、私たち家族も同行したのですが、各地で時代変革の事件が多い時でした。クエートでは湾岸戦争に巻き込まれ、高3と高1の二人の子供と大変な目にあい、家財道具も全てなくしました」とミヨコさんは昨日の出来事のように思い出す。

定年を機に、二人の子供達も自立、長女も結婚したため、これからはのんびり家庭菜園や趣味の機械いじりを楽しもうと口和に帰ってきた。新築した家で母に孝行したいと戻った夫妻だったが、しかし母親は安心したのか、ほどなく死去された。



▲口和郷土資料館として整備された元高校分室
▼秋の草花を活ける安部ミヨコさん



暫くして、当時の口和町教育委員会から口和町郷土資料館の管理をやってほしいとの話があり、奥さんのミヨコさんは、安部さんと二人でやってみないかと勧めた。資料の整理や展示等のほかに館内外の管理、清掃があるから、夫婦で協力しないとやっていけない仕事だろうが、周辺には大好きな草花の多い豊かな自然がある。

■物の台になっていった蓄音機との出会い

二人は前任者から引継ぎ、郷土資料館の管理をはじめた。

「資料館といっても、閉館状況だったんです。床はでこぼこ、中はホコリだらけで、掃除が大変でした。それまで中学生等の宿泊施設でもあったため、肝試し会場にされたりしていました。でも庄原市に合併する時（平成17年3月31日）、町の郷土資料館をきちんと保存し

てほしいと住民の要望が高まり、旧口和町最後の予算で破損していた床や壁を修理してくれることになりました」とミヨコさんはいう。

「当初は膨大な民具が物置状況で収納されていて整理するのが大変でした。そんな中で収蔵品の台になっていったものがあり、開けてみると古い蓄音機でした。大正7年に製造された蓄音機の一台中です。疲れも忘れて夢中で蓄音機を直して動くようになりました。それが運のつきですね」と安部さんは苦笑する。

ふたりの献身的な努力で民具類も整理され、次第に新たな資料館に姿を変えていく。

蓄音機を修理再生した安部さんは、古いものの良さを知ってほしいと地域の人達を招いてレコード鑑賞会を開いた。長い眠りの歳月を経て命を得た古い蓄音機、SPレコードから流れる「テネシーワルツ」(江利チエミが初めて吹き込んだ曲)の素朴だが力強い音響は、聴く人々に深い感動を与えた。

この試みはたちまち話題になり、地区の長老榎原さん、元町長の盛谷さんが発起人になり口和郷土資料館後援会が結成され、月一回程度はミニコンサートが開催されている。

噂が広がり、マスコミでも取り上げられたことから、蓄音機用のSPレコードや動かなくなって眠っている音響機器等が、全国各地から郷土資料館に次々と寄贈されるようになってきた。それに応えて安部さんのエンジンニアとしての心意気も甦り、時計からカメラ、テープレコーダーやテレビ等まで次々と修理していくようになった。

「昔のものは分解して部品を交換すれば再生できるものが多いんです。入手困難な部品は

私が手作りしたり、他の機器から部品を取り一つでも多く修復しています」

責任感の強い安部さんは、寄贈してくれた貴重な音響・映像機器は放置できないと、全て点検し、再生可能な製品は殆ど修理し、使用できるようにしている。

エレクトロニクスメーカーで働いてきただけに、どんな製品が貴重かについての専門知識も身につけている。

一階の玄関に近い部屋が安部さんご自慢の音楽鑑賞室。蓄音機、電蓄、放送局用レコードプレーヤー、ピアノ等を配した部屋で、レコードコンサート用の椅子も配置できるようになっている。

中央にはマニアがため息をつくような貴重な蓄音機やオーディオ装置、300枚以上のSP・LPレコード等が誇らし気に輝いて並んで、ドーナツ盤を演奏する昭和30年代のジュークボックスも健在。

「とんでもないものをお見せしましょう」と言ってお部さんが手に取ったのは一枚のレコード。明治時代に作られたSPレコードで端唄が録音され、重くて片面にだけ録音されている珍品。もう一枚は市販のもの1.5倍はある40センチの大きなLPレコード。これは米軍が兵士の娯楽施設や軍の放送局で長時間鑑賞できるようにと特製されたもの。このレコードを50年前にFEN(駐留軍放送局)で、アナウンサーをされていた東京の女性がわざわざ当館まで見にこられたという。幸いここにはこの40センチレコードが聴ける、放送局用プレーヤーも揃っている。

二階の一室には、安部さんが命を与えた

▼寄贈された古い機器の修理に余念がない安部さん



▲音楽鑑賞室で安部夫妻。40cmのLPレコード、明治時代製造のSPレコードを手に

▼国内外の古いタイプライター 昭和30年代のジュークボックス



100年前の磁石式電話機、蓄音機、真空管ラジオ、テレビ、録音機等、ひと昔前の懐かしく、時代を象徴する貴重な品々がところ狭しと展示されている。

「貴重な世界最初の小型トランジスタテレビもここにはあるんです。SONYという社名になる前の東京通信工業時代の録音機や最初のベーターマックスにVHSもあります。テレビもいろいろあります。子供達は古いモノクロテレビの画像を見るとびっくりし、お年寄りには懐かしがって大喜びです。」

この一室に在るだけで一日飽きることなく、映像と音響機器を肴にしなが、昭和という激動の時代と各々の人生を語ることができそうだ。

資料館は現在週3日間（月・木・土曜日）に開館し（要望があれば開館）、閉館日には公民館や集会所等に行くことが多い。

「機器を修理してくれという人もいますが、それはお断りしています。一応市の職員として勤務していますので、個人的な要望を受けることはできませんから」

資料館を我が子のように手塩にかけてきたご夫妻は閉館日にも出て来て機器の修理や組み立てに従事することが多く、1階右手の「修復室」には、安部さんの診断・治療待ちの機器たちがうずたかく積まれていた。その一隅に安部さんの修復作業場がある。ライトアップした作業台には色々な工具や測定器や部品、真空管や半導体等が沢山並んでいる。熟練技師とは言え、細かくて目や肩腰の疲れる大変な作業だと思つづく。一方ミヨコさんの方も、休日には資料館の

調度品を手作りしたり、展示品の清掃、庭の手入れで忙しい。廊下にある和紙の明かり、民芸風のれん、解説のしおり等々に至るまで、趣味人のミヨコさんが制作したもので、「女房がいるからやってこれたんです」と安部さんはしみじみ語っていた。

■映画を愛する人たちと

さて最後に、皆様を「ふれあいシネマ館」へご招待しよう。

1階音楽鑑賞室の奥にあり、ドアを開けるとそこは真新しい赤い椅子が64席並ぶミニシアターになっている。館主が暗幕を下ろしておもむろに映写機にスイッチを入れると、スクリーンには無声時代の映画が映し出された。胸がときめく映画館の雰囲気そのままだ。

2台の35mmアーク式映写機や35mmフィルム、貴重な映画ポスター等は、地元の映画館で使われていたもの。赤い立派な椅子は、一昨年岡山県玉野市の映画館から寄贈を受けたものと言う。この椅子は口和郷土資料館後援会の有志が引き取りと設置工事を行った。

スクリーンはシネマスコープにも対応できるものを旧口和町が常設してくれた。

昨年は地域の人を招いて話題作「フラガール」や「しゃべれどもしゃべれども」の上映会を行い、この地域でも本格的な映画が楽しめる場所があることに市民は感動した。映画の楽しさ、素晴らしさを子供達に知って欲しいと、安部さんと後援会では、話題作や名画の定期上映会を企画している。

文／浅井登美子 写真／小林恵

●口和郷土資料館 ☎0824-871-2230
開館日／月・木・土 入館料／無料



▲2階の修復された音響・映像機器室。真空管ラジオ、蓄音機、録音機、時計、テレビ等々。
▼64席の椅子とシネマスコープ用のスクリーンが設置されたミニシアター
◀安部さん夫妻。壁には貴重な映画ポスターも並び



「いのちの繋ぎ役」としての
有機農業を 山下一穂さん（高知県土佐町）

田舎は豊かな自然と先人たちの知恵の宝庫。Uターンしてこれらを活かしてビジネスや活性化に取り組む人々を紹介する。

雑草の中で野生児のように根を伸ばす逞しい野菜たちが、今年、東京の老舗百貨店のお歳暮アイテムに選ばれた。そのラベルには「山下農園」の名が光る。時代を先取りしたマーケティングや新たな販路拡大に、独自の手法で道筋をつけていく。「突撃隊ですから」と笑う山下一穂さんは、その自然農法塾の主宰者。Uターン後に開設した塾は、すでに多くの卒業生を輩出し、3期目の秋を迎えた。

写真は、立派に育ったこの地
独特のカボチャ

NPOと県との協働事業で

「有機のがつこう・土佐自然塾」は四国山地の中央部、高知県の山あいに拓けた土佐町に広がる。標高差のある地形は美しい棚田の風景を生み、寒暖の差を生かして、昔から良質の米を産出してきた土地柄だ。

この土地に「土佐自然塾」が開かれたのは平成17年。県がNPOとの協働事業を募集したのがきっかけだった。

有機農業に取り組んで8年。山下一穂さん(58)の自然塾開設の提案は、橋本大二郎前県知事の共感も得て採用となる。開設にあたり、県からは初年度に1230万円の助成金が下り、その後2年目以降は技術支援という名目で、2名の県職員が派遣されてきた。塾は運営や施設管理全般を担当し、NPO法人として活動をスタート。現在は11名の塾生が研修中だ。

取材に訪れたその日は、紅葉が見頃の秋の日だったにもかかわらず、途中で雪に降られるほどの寒さとなった。国道脇の急斜面を登りつめると、かつては大工養成学校だったという「土佐自然塾」の校舎が現れた。広い敷地に食堂や塾生の宿泊棟、資材置き場、納屋などが点在する。

校舎の玄関を入ると、塾長の山下さんの気さくな笑顔があった。ちょうどお昼時間ということで、塾生のいる食堂に案内された。30代から50代という幅広い年齢層が、和気藹々と寛いで食事を摂る光景は、最近では貴重ですらあるだろう。塾長も塾生もない、屈託のない昼休みだった。

1時から始まった納屋でのミーティングは、午後からの作業の打ち合わせだ。昼休みのフレンドリーな空気が嘘のように、それぞれが「仕事」の顔に戻った。あさつきの出荷、人参の間引き、雪で倒れた支柱の撤去と、山下さんを中心に手際よく分担が決められていく。呼吸の合った無駄のないテンポは、重ねてきた研修の日々の賜物だろう。

10年の東京暮らしでUターン

大学進学で上京し、以来10年を過ごすことになった山下さんの東京暮らしは、現在の彼からは想像もつかない、ミュージシャンの生活だった。大学の授業には出ず、スナックでアルバイトしながらドラマのトレーニングに夢中になっていた。

在学中から少しずつ仕事が入り、気がつくどプロのドラマーになっていた。銀座や新宿のナイトクラブにディスコに、連日のように出演。生活は夜型となり、やがて体調を崩していった。なんとか健康を取り戻そうと、それから自然食専門店などに熱心に通った。「ちょっととした健康オタクでしたよ」

その後、本格的に体調を壊し、帰郷して入院。退院後に再び上京するが、夜型の生活は変わりようがなく、故郷へのUターンを本気で考え始めた。業界独特の空気にも馴染めない何かがあった。

やがて帰郷。30歳の時に、高知市内で母親が経営していた学習塾に籍を置き、教師となった。荒れる中学生たちに手を焼いていた母親から、バトンタッチする形で、山下青年は生徒たちと向き合った



▶和気あいあいのランチタイム。今日のメニューはカレーうどん



▶収穫した野菜を前に、納屋での打合せ ▶大工の養成学校を改装した土佐自然塾の校舎

時代は高度成長期も終わり、安定期に入った頃。経済一辺倒に傾いていく大人たちの陰で、子供らは行き場を失い荒れすさんでいた。塾の生徒も同じだった。暴言、暴力の横行する日々。彼らを制圧したところで、本質的な問題は何も解決しない。

山下さんはい。やる気のない子に競争心ばかり煽ったところで何になる。子供たちが本質的な部分でやる気をだすには、彼らの存在価値そのものを認めるべきではないか。

彼らから笑顔を引き出すために何が出来るのか。自問自答を繰り返すうち、自分に何が出るのか。出来ることをやって彼らに見せるしかないだろうという思いが、膨らんでいった。



▶雑草を抜くか残すか、畑を丁寧に歩いて見る山下さん
▼「無農薬なのに虫食いが無いのではなく、無農薬だからこそ虫食いが無い」と山下さん



農業は、その自問自答への答えだった。子供たちと本気で向き合った18年に及ぶ長い年月。それが、農業という新しいステップへの大きなバネとなつて、山下さんを後押しした。

自然界の仕組みを生かす

家庭菜園から出発した山下さんの農業は、持ち前の研究心と創意工夫で、成長した。化学肥料は絶対に使わない、里に近い山に広葉



▲「いい土は微生物の動きが活発で、軟らかい」と、ハウスで

樹を植え、落ち葉を畑の肥料にしていた昔の農法に、エコロジカルな姿勢を学んだ。燕麦や萱などを使えば、作物のためにそんな自然環境が再生できることも考え出した。

取材の日の午後、山下さんの黄色いFITに同乗して、塾の周囲に点在する実習用の農地を見せてもらった。町有地を借りたこれらとして使っているが、山下さんは他に、近くの本山町に個人で「山下農園」も経営している。ここにも研修生が5人いて、70品目程の野菜を作っている。

実習用の畑は見たこともない不思議なものだった。整列した畝の周りを雑草が覆い、その間から水菜や小松菜、人参などが健やかに育っているのだ。しかし、あの自然農法で知られた福岡正信さんの農地とも、様子が違う。「雑草は作物の生長を妨げない程度に残します。虫食いの野菜が有機栽培の象徴のように言われますが、うちの野菜はこの雑草とのバランスのお陰で、虫食いもなくなきれいなんですよ」と山下さんはいう。

雑草を棲家とする蛙や虫たちと、それらを天敵とする青虫たち。雑草に棲む生き物たち

のお陰で、作物は虫食いの被害を免れるということだ。自然界の仕組みを可能な限り生かし、人為的なことはやり過ぎない。そうすることで、土の中では作物の根が養分を探して自分でどんどん伸びていく。耕さない、肥料を与えないという従来の自然農法の考え方を尊重しつつも、そこに独自の工夫を加えていくのが山下流だ。「超自然農法」、山下さんは自身の農法をそう名づけた。

有機のマーケットをこじあける

健康で美味しい野菜であることの次に山下さんが重視したのは、生産性の高い農地であるということだった。農業を持続可能な産業として、次世代に繋げていくためには、農業の経済性を無視するわけにはいかない。

土づくりはその大きなポイントだった。土が出来ていれば作物は勝手に育つものだと、山下さんはいう。ご自身の著書「超かんたん無農薬有機農業／農村報知新聞社刊」では、土づくりから始まるさまざまな品目の栽培方法を、惜しげもなく公開している。ちなみにこの本の推薦人は橋本大二郎前高知県知事。彼は選挙の公約に「有機の大地を目指す」と謳っていたほどの理解者だ。

そして土づくりの他に大事なことが、生産された作物の販路を確保することだ。「有機のがっこう・土佐自然塾」は「山下農園」も含めて、四国から近畿一円の「こだわりコープ」



◀橋本元高知県知事が書いた「土佐自然塾」の看板



◀群馬県からの塾生青本さん。「ちゃんとした農業を学びたくてここへ来た」と言う

やスーパーの産直コーナーへの出荷、他に個人宅配も行っている。さらにはネット販売や、埼玉県の手量販店との取引も始まった。しかし山下塾長の販路開拓はこれだけでは終わらない。「有機農業のマーケットをこじあける」という考えのもと、講演やイベントなどにも日々奔走。そこから生まれる人脈やメディアとの関わりは、思いもかけない市場開発へと繋がった。今年も東京の老舗デパートのお歳暮アイテムに「山下農園」の有機野菜が選ばれた他、大手飲料水メーカー社の懸賞キャンペーンの景品としても、その使命を果たした。他にも山形のイタリアンレストランとのコラボレーションなど、マーケットは多様化する一方だ。

「農地はこれ以上増やすつもりはないので、開拓した販路は塾の卒業生とシェアしていきます」彼らの自立をサポートするためにも、有機農業の未来のためにも、販路の拡大は大きな課題なのだ、山下さんはいう。

「土佐自然塾」の第一期生・間浩二さん(42)は卒業後、5反の畑を借りて奮闘中だ。「今でも塾長には何でも相談します。経営的なこと、土づくり、分からなくなると、とにかくここへ来るんです」



▲朝掴みした野菜をパック詰めする塾生たち。山下さんも手伝う(右側)
▼生姜は高知の特産品。泥を落とすと健康な姿が現れた

面倒見のいい山下さんに、全幅の信頼を寄せる卒業生たちだ。

競争心は捨てる

塾の開校式で山下さんが最初に塾生に伝えるのが、「競争心は捨ててください」という言葉だ。そんな幼稚なモチベーションは農業には一切不要。何のための有機農業か、有機農業を通じて何を指すのか。農家としての誇りを持ち、健康な作物を作り、環境を浄化し、産業として育成する。ひいては日本の食文化を守り、美しい日本を再生させる。次の世代への「いのちの繋ぎ役」としての自分を、先ず自覚してください。持続してゆく農業には、



▲懸賞用野菜パックを箱詰めする山下さんの妻みどりさん(左)と研修生の千葉香恵さん
◀「焼いて食べると甘く、酒の肴に最高」と山下さんが自慢するネギ

こういう確固とした姿勢こそが大切なのですと、山下さんは力を込める。

いちばん楽しい時間は、「塾生たちがいきいきと研修している姿を見る時です。昨夜も9時過ぎまでみんなで出荷作業を頑張りましたよ」と山下さん。現在彼は農水省に設置された「全国有機農業推進委員会」の委員の一人。平成20年度には、農水省の概算要求で4億6千万円が認められ、有機農業に初めて国の予算がつけられた。

かつては異端視すらされていた有機農業が、県や国を巻き込み、静かなうねりとなって動き出してゆくのを、この土佐の大地で実感した一日だった。

●有機のがっこう土佐自然塾「山下農園」
☎0887-82-1700

●地域資源をビジネスと活かに——②

「秘境杣の里」の再生に奮闘して10年

轟亮二さん(福岡県矢部村)

財団法人「秘境杣(そま)の里」を20年前に設立した福岡県八女郡矢部村。現在では人口が1700人を切り、一年後には八女市に合併することが決まっている。

「村は自然の博覧会」を合い言葉に、都市住民と村民との心豊かな交流の場を目的とした杣の里溪流公園は、開園当初こそ沸き返るような都市の人々で賑わい、村は活力を得たが、年を追うごとにじり貧。

そこで態勢を見直し、一般から支配人を募集した10年前Uターンでふるさと矢部村に帰ってきたのが轟亮二さん(41)だ。

海拔600mにある杣の里溪流公園の魅力と共に、10年間にわたる轟支配人の奮闘ぶりをお届けする。



▲宿泊施設「ソマリアンハウス」
▼杣の里溪流公園の施設 左上の建物が「ソマリアンハウス」、右下がレストラン「ル・クレゾン」。上に杣の大吊り橋が見える



▲支配人轟亮二さん
ソマリアンハウスを背景にして



◀宿泊客の秋丸和基さんと眞理子さん夫妻



▲レストラン ル・クレソン入口



◀ル・クレソンの一階に展示してあるクラフトセンターの作品



◀レストラン ル・クレソンの店内テーブル

創作洋食が人気のレストラン

目眩するように高い「柚の大吊り橋」から見下ろすと、秘境柚の里溪流公園の起伏ある山々は色付き始めていた。「今年には台風が来なかつたから、紅葉がきれいかですもんね」公園入口にある柚の迎戸館で受け付けをしている新原由紀子さん（61）が、ちよつと自

「勤めて11年。お客さんとの会話が楽しく、仕事は張り合いがあります。福岡、北九州からが多いですね」

慢気に教えてくれた。

柚の迎戸館を抜けて、右上に見えるレストラン ル・クレソンへの遊歩道を歩き始めると、南国の果物のような柔らかい甘い香りが漂ってきた。果物か花か。

ル・クレソンは、矢部村の素材を活かした創作洋食で人気。一番人気は、地鶏とシイタケをたっぷり使ったソマリアンカレー、サラダとフルーツが付いて1260円だ。

開店の時からこのレストランで働いている宮崎順子さん（63）は、当時の混雑ぶりを懐かしそうに振り返る。

「お客さんをどうもてなすか、びくびくしながら仕事をしました。洋食というのを知らなかつたし、都会に出たことが無かつたのでもう辞めようと、トイレに行ったら涙が出るんですよ。今では、良い人生を送ってきたと思えるようになりました」

木造ロτζジ風のル・クレソン2階で宿泊客が食事中だった。福岡県みやこ町からやって来た秋丸和基さん（56）と眞理子さん（51）夫妻は、「八女市に住んでいる友人が、ここがいいよと薦めてくれたので」と、初めての訪問である。

「秘境でしたね。何度も何度も道を聞いて。着いた時にはもう暗かつたので、明日の紅葉が楽しみです」

秋丸さん夫妻が泊まっているのは、北歐風の雰囲気の魅力の宿泊施設ソマリアンハウスだ。テレビは部屋に置いていない。満天の星空を眺めて入る露天風呂が自慢である。

アパレル業界から転身して

「最初は、何で何でと、疑問符ばかりでした」



と、「秘境柚の里」支配人の轟亮二さん。決して最初から順風満帆でやって来られた訳ではない。

アパレル業界で営業をやってきた轟さんは、手をこまねいて客を待つことはできなかった。日本で最初に地方自治体が出店したアンテナショップ「そまりあん」が福岡市天神にあったが、3年前に、博多駅近くにもう一店舗を開店した。

天神店では地元素材を使った「田舎弁当」がメインメニューだった。人気はあるが回転率が悪い。撤退の話が出ていたところに、計り売りの総菜20数種と青空市場を始めた。これが受けた。

「右肩も右肩、怒り肩上がりで初年度1500万円、今では4800万円の売上げ。目標は1千万円だったが、たつた10坪でそりゃ無理と誰も本気にしなかつた」

村の生産者40人が順番で、日曜祭日以外は、



上/旬の厨房、ソマリアの店内でスタッフと一緒に
右下/ル・クレソンで働く宮崎順子さん
左下/新原由紀子さん

毎日売り子として店に出る。これが、お客のニーズを肌で感じることもなった。DMを3000通発送したら、15%も回答が返ってきた。轟さんが以前働いていたアパレル業界では、1%の回収率が当たり前なので、反応の良さは励みになった。

「そまりあん」の一番人気は、ル・クレソンでも人気のソマリアンカレーをレトルト加工したもの。店と通販を合わせて年4万食ほどを売り上げる。

「ようやく柚の里は、俺たちのためになるものを作ってくれた」と、村人から喜ばれた。漬物で年800万円を売り上げるおばあちゃんがいる。「目指せ1千万円、オーバーですよね」と、轟さんは期待している。

「ゼロが一番評価される役場の論理がまかり通ってしまいましたし、ロットの大きさは問われていなかった。どうせ要るからと、紙袋は未だに設立の時のものを使っている」

消防団、剣道…地元の人脈を広げる

そこで轟さんは、地元消防団に入って活動し、小学生の時からやっていた剣道を本格的にすること、地元の人脈を広げた。

「消防団の団結と剣道で繋がったネットワークの広がりは、すごく感謝していますね。地元で話を聞いてくれるようになったし、人脈を通じて、福岡の大学や隣町の高校が合宿で使ってくれていますから」

今でも週1回は福岡へ。物産展などでは3、4日間泊まり込みで営業に出る。

「個人的なネットワークを利用して、顔だけは出していますわ。商品売るよりも、自分を

売っとかないと」

やはり営業では、民間企業のノウハウが生きているようだ。

結婚して2年目に熊本市から矢部村に帰ってきた轟さんの家族。子どもを抱えた妻の順子さん（39）は、「漠然とした不安がありました」と、10年前を振り返る。

「子どもが小さかったから医療機関が心配でした。今は、何とかなるもんだなと思えます」

2LDKで家賃27000円の村営住宅。小学5年生に成長した息子と3人で暮らす。村会議員を務める父親の轟榮治さん（65）が近くに住んでいる。

「矢部村を出た人間が矢部村を活性化してほしい、一人でも二人でも若い者が帰ってきてと考えていました。そこに支配人の試験があるというので、長男でもあるし、帰ってこんかと」

轟支配人としては、一年後に迫っている八女市に合併された後が不安だ。

「財団は儲けなくて良いという考えから抜け出せず、合併を目前にして村は、その厳しさに対応できていない。役場が一番大きな企業、その次がうちなんです」

轟さんは、柚の里と村などが一体となった地域再生協議会を立ち上げ、合併後も計画を実施できる「地域再生計画」の認定を総務省から受けようと計画している。

「食の安全が言われている今、うち辺りに入れば、宝の山なんですよ」

ふるさと矢部村にUターンして10年。

「村全体が大きな親戚みたい。のんびりして一日が48時間に感じます。明るいうちに家に



左／妻の轟順子さん
右／父親の轟榮治さん



帰れるのはささやかな楽しみです」

都市で培った営業のノウハウだけでなく、地元で「角打ち」と言われる酒屋での立ち飲みで得る情報や、矢部村剣友会や地元消防団の仲間を支えられて、轟さんは厳しさを増す過疎村の大企業を先頭に立つて盛り立てようとしている。

冬の間は雪に閉ざされてしまうこともある柚の里溪流公園。もうしばらくすると、周辺の山々にしゃくなげが満開になる季節がやって来る。轟支配人は今日も、しゃくなげ祭の準備に余念がないことだろう。

写真・文／芥川仁

●矢部村役場 ☎0943-47-3111
●秘境柚の里 ☎0943-47-3000

家族で花とハーブ&アロマビジネス

「プロステージ花言番」 土井文彦さん（秋田県男鹿市）



▲注文のアレンジメント・フラワーを前に、土井さん夫妻

父親の病気を機に高校の教師を辞めて帰郷した土井さんが選んだ仕事は、家族が参加でき、地域の活性化に貢献できる「花屋さん」。花と植物のある癒しの店は、さらに時代の要請に合わせて、ハーブ&アロマを扱う店へと拡大し、地域交流の拠点になっている。

親や兄弟と暮らすための決断

男鹿市へ向かう入口付近に、高さ約12メートルの巨大な「なまはげ」像が「ようこそ男鹿半島へ」と出迎えてくれる。土井さんの店がある男鹿市船越地区はここ、なまはげ観光案内所の先にある。国道101号線を右手に入っていくと、デザイン性溢れるおしゃれなプロステージ花言番の建物が目に飛び込んできた。郊外に位置する店舗のため、大半は車で来店し、お店の雰囲気を楽しみたいと訪れる。ドアを開けると、芳しい花とハーブ&アロマの香りにあふれた店内には、切り花・鉢花スペースの他に、ハーブ&アロマや化粧品コーナーが設けられている。また、

集いの場では、本を読んだりお茶やハーブティーなどを楽しめる大テーブルと椅子が設置され、花を買いながら、ゆったりとすごしてもらうための素敵な演出が施されている。

集いの場の先には、インターネットで情報発信やウェブ更新の作業を行う土井さん専用のパソコンコーナーがある。さらにその奥は、ワイン、ブランドデー、ハーブコーディアルなどが、ところ狭しと並んでいるミニバーとなっていて、パーティーなども開催されているようだ。これまでの店先に花を並べる都市商店街の花屋さんとは雰囲気が違う。

土井文彦さん（49）は、地元の高校を出て宮城県仙台大学を卒業後、仙台市の朴澤女子高校（現明成高校）の体育教師になった。数ヵ月後、父親が癌で倒れたという知らせが入り、母親や4人の兄弟の面倒を見なくてはならないと帰省を即座に決断した。

大好きな家族を養うために選んだビジネスは、「美を追求する花屋さん」。突然パッとひらめいた、まったく畑違いの分野に躊躇することなく飛び込んだ。

そこで技術習得と経営学を学ぶため、仙台



▶平成18年10月に移転オープンした「プロステージ花言番」

で一番厳しく、事業家として有名な、株式会社フラワー中山の曳地邦男社長のもとに走った。事情を話したところ、快く承諾してくれ、土井さんは不眠不休の修行に努めた。9ヵ月という短期間で花卉やフラワーデザイン、ビジネスについて勉強した。

そして、昭和59年3月、故郷の秋田県男鹿市で「有限会社秋田第一ガーデン」を立ち上げた。開店した当初は、冠婚葬祭・観葉植物・鉢花を中心に営業販売をしていた。さらには、秋田市内の企業に花束・フラワーアレンジメントのデザインの斬新さをPRし業績を上げていった。

後に、花の納入先の会社で事務をしていた花のような華やかさを持つ田津子さんと出会い、大恋愛の末結婚。沢山の鍛錬を積み上げ、今では、店の人気と発展に欠くことの出来ない存在。ご主人の土井さんも「お客様はいつも、『奥さんいるっ?』と尋ねて来ます。僕も花の知識や技術については自信があるのだが、とても妻にはかなわない、脱帽です」と言うほどのスペシャリスト。

田津子さんは、もともと花や植物が大好きで、高校を出て大阪の企業で働きながら生け花の師範免許を取得している。

二人の父親

土井さんの父親は、住宅設備機器の販売工事会社を経営しており、東北全域を駆け回っていた。地域の人々を愛し、将来を期待されていた父が突然の交通事故で他界してしまったのは、土井さんが小学一年生の時であった。土井家は悲しみに打ち拉がれ途方にくれた。

その後、土井家存続と事業継承のため、母は亡くなった父の実弟と再婚することになる。「父母は、事業を盛り立て愛情たっぷり何ら不自由なく、5人の子供を育ててくれました。その父が癌で倒れ、再び窮地に追いやられた。幸い手術も成功し、その後、不撓不屈の精神で病を跳ね除け、事業に復帰でき、何度も体調を崩しながらも家族のために頑張り続けてくれました。」

そんな親父の役に立ちたいという思いで暇を見ては、父の仕事も手伝っていました。その甲斐もなく、一昨年子どもや孫たちに見守られながら、66歳で激動の人生を閉じました。私をこれまで育ててくれた二人の親父には深く感謝したい。忘れてならないのは、その影となり日向となっていた、太陽のような明るい笑顔の母親の姿なのかもしれません。」と土井さんは語る。

ハーブ&アロマ商品も充実

平成18年10月「プロステージ花壺番」は、移転オープンした。以前は、船越地区の商店街に「花の第一ガーデン」という店舗を構えていたが、駐車スペースを確保するため、郊外へ店舗名も新たに、移転オープンすることとなった。新店地は、父親の会社があった場所、「その建物を生かしたい」という熱い思いで決定された。シンブルな白を基調にした店内には、色とりどりの花はもろろんのこと、オーガニックハーブ、エッセンシャルオイル、ハーブ・アロマテラピーなどの製品を多数取り揃えている。東京表参道や六本木ヒルズなどにショップを構える、ハーブ&アロマのメ

ーカー「生活の木」のパートナーストップとして、「花壺番ハーブギャラリー」が併設されている。

花や草の心地よい香りと、肌にやさしい手作り石鹸、人気のハーブティ、自然素材の各種化粧品、雑貨小物などが置かれ、思わずうっとり。店内のアンティーク調の家具の上には、プリザーブドフラワーが鮮やかな色彩



▲「生活の木」ハーブ&アロマコーナー、化粧品コーナーも充実
▶店内にはひと味違う花が多い。注文の花を制作する田津子さん



▶手作りのMTBやロードレーサーでレース参戦することもある土井さん
▼土井さん専用のパソコンコーナー



を放っている。陽だまりには、チンチラシルバリーの「ぶりん」もお客様をお迎え。
 同店ではフラワーアレンジメント教室、ハーブを使った手作り石鹸教室などを開催しており、女性のお客様が急増中とのこと。

地域コミュニティの場として

土井さんは、若い時からスポーツ万能で、大学時代には、陸上部長距離に所属しキャプテンをつとめた。選手としても全日本インカレや全日本大学駅伝に出場するなど、本格的に活動してきた、根っからの体育会系である。

ところが、花屋さんをはじめてからは、多忙を極め、生活が不規則になり、運動不足で次第に太り、体力も衰えてきた気がした。
 そこではじめたのが自転車だという。憧れの自転車ブランドの高級なフレームを購入。全て自ら組み上げ、高価なマウンテンバイクを完成。仕事の合間には、最高のロケーションの男鹿半島でトレーニングに励んだ。通常50キロ、多いときで200キロもの道のりを走って鍛えた。その後、趣味が高じてロードレースやMTBレースに参戦し、秋田県や東北のロード大会では優勝、東日本大会で入賞を果たすまでになった。

また、土井さんは二人の子どもの中学時代PTA会長を5年務めた。持ち前の行動力とアイデアでコーラス隊を結成するなど会員の絆をつくり、地域活性の源を築いたという。その活動が評価され、平成15年日本PTAより個人表彰を授かる。

その仲間とは、今なお交流を深め、故郷に情熱を燃やし、地域の絆づくりと地域活性を図っていききたいと考えているようだ。

そんな中、もう一人の力強いアシスタントが加わった。長男の弓弦さんである。

高校を卒業後大学進学を望んでいたが、何の目的も持たずに進学しようという長男に土井さんは、何か目標や目的が決まったとき、集中してそのことへ向かって勉強した方が、効果が大きいと進学をさせなかったようだ。

親の働く姿を見て弓弦さんは、ここで働きながら人生の目標を立てることを決心した。

長女の莉里子さんはまだ高校生だが、卒業後はプロステージ花壺番で働きたいとやる気



店の前で土井さん夫妻、配達から帰ってきた弓弦さん。愛猫ぶりんもハイポーズ

を見せている。

土井さんは、二人の子どもにもこう告げている。「早く自分のめざす道を見つけ、計画的に行動をし、それを継続することで幸せな人生は得られるのだ」と。

インターネット店、花とハーブ&アロマのギフト通販花壺番にも力を注ぐ一方、今後、プロステージ花壺番をパーティーやプチブライダル、さらには、地域コミュニティの場として、老若男女を問わず、気軽に利用いただけるように、さまざまな活動やイベントを開催していきたいと、土井さんは意欲満々の笑みをうかべていた。文／横田塔美 写真／小林恵



貸民家1号館の囲炉裏付き居間にて、若井さん

●地域資源をビジネスと活力に——④

民家や農産物を通じて都市交流

越後里山活性化の仕掛け人 若井明夫さん（新潟県十日町市松代^{まつだい}）

豪雪地帯の越後は豪雪に耐える木造家屋と美味しい棚田米や野菜の特産地。東京で不動産に関する資格の数々を取得した若井さんは、帰郷すると空き民家を改修して都市住民の体験交流施設に活用、有機味噌を製造する等、越後里山活性化のリーダー的役割を担っている。

越後湯沢と直江津、金沢を結ぶ三セク「ほくほく線」は観光客にも人気の列車で、越後各地の発展に大きく貢献している。越後や十日町の物産館を併設した「まつだいい駅」は、上越市が毎年開催してきた「越後ふるさと体験ツアー」の玄関駅で、そこから徒歩約5分のところに若井明夫さん（60）の経営する（有）ワカイ測量、若井事務所がある。土地家屋調査士、行政書士、一級建築士等の資格を持ち、家や土地など地域の人たちのよろず相談窓口を担ってきた若井さんの自宅兼事務所、我々が訪ねた日も近所のお年寄りが訪ねてきていた。家の改修の相談のようだ。

事務所入り口には「新潟まつだいい／どぶろく」の旗が立ち、店頭には小瓶に入った商品の見本が数本並んでいる。松代地区は平成15



▲（有）ワカイ測量の建物



▲里山アートミュージアム
▼市内にある貸民家の一つ





空き家を「貸民家みらい」に再生

年、近隣町村と共にどぶろく特区の認可を受けた。若井さんは翌16年全国第一号で製造免許を取得。現在新潟県内には他の特区を含めて15人ほどの人がどぶろくを製造している。どぶろくは鮮度が大事、通年製造しているが、新米の酒はまた格別で、若井さんのどぶろくを待っている人が多数いる。

若井さんは地元の高校を出ると、春から秋までは農業、農閑期には東京へ働きに行く生活を三年間した。

「このあたりは山間部で、五反百姓が多いので機械化しにくい。おまけに豪雪地帯で4」

5メートル積雪の年もあります。そのため男は皆冬には出稼ぎに行く習慣でした。私は4年目から東京に住んで、設計事務所などで働きながら勉強して行政書士や二級建築士の資格などを取りました。昭和51年、27歳の時帰郷して、すぐに測量事務所を開業したわけです。東京では宮城県出身のこしみさんと結婚、帰郷後間もなく長男も生まれました。

当時はオイルショックも終わり高度経済成長時代の幕開け期。都市化・近代化の波は地方にも押し寄せて、道路の拡張整備、農地の圃場整備、家の改修等が行われていたが、旧松代町にはこれらの調査や測量をする専門家がいなかった。そのためUターンして事務所を開設した若井さんは次々と仕事を頼まれ、家の設計も多数手掛けた。

「しかし、親の農業を手伝う暇がないような生活をしてきて、気が付いたら少子化と高齢化が進み、農地は荒れて休耕地になっていたり、空き家がぼろぼろと出てきました。何とかしないといけない、空いた民家を修復して貸民家として活用できないかと考えたわけです。11年前の平成9年、多分私が最初に始めたのではないかと思えます。この民家活用では当初県が半分、町が2/3割助成してくれたので大助かりしました」

貸民家は都市の人の農業体験や長期滞在、Iターン移住のための田舎体験場として活用、若井さんは今後の地域活性化の一翼にしたいと「みらい」という名前をつけた。豪雪に耐えるように作られた木の家は堅牢で、一部を直せば古民家として輝いてくる。山間部では除雪用の池や川を配したり、敷地内にブ

ナの巨木があるなど、周辺の自然環境も魅力的だ。若井さんは頼まれては空き家を買うことになり、現在貸民家「みらい」を5軒所有、うち一軒には次男の家族が住み、一部は味噌蔵、どぶろく製造所等に使っている。貸民家では囲炉裏と自炊するための用具のすべて、寝具等が付いていて、トイレは水洗化してある。宿泊料は最高一人3800円なので、冬以外の土日はほぼいつも利用され、昨年は2200人が宿泊した。

その一軒、市内にある町屋風民家を見せてもらった。囲炉裏のある広々とした落ち着いた居間で、奥の納屋はどぶろくの熟成室。宿泊は二階にある三つの和室だが、上がってみると昨日の宿泊者は布団を敷いたまま乱雑にしている。「最近の利用者を見ると、比較的高年より若い人の方が

どぶろくを製造する民家



自家製有機大豆を味噌に熟成。ワサビを入れておくとカビがはえない





休耕地で栽培した大豆



いと思つたのは、生産者の顔が見えない農産物への不安感も影響したようで、農薬と化学肥料を使わない食品を作るのは、若井さんにとって健康維持のための必然であり、これを都市の人たちにも判ってほしい、共有したいという願いがあつた。貧民家に泊まって農業体験をする活動で東京世田谷区の人たちと知り合い、以来若井さんの作る味噌、納豆、野菜、どぶろく等は、殆んどを世田谷区民に直売している。

現在農地は、田んぼが150アール、畑が100アール。「もつと大豆等の生産を増やして味噌等の加工量を拡大したらという話もあります。有機栽培は手間がかかりますので、無理せず納得できるこの範囲でいい。これからはお年寄りや信頼できる農家を作つたいいものを買取の方法を導入していきたい」と思っています」と若井さんは言う。

里山はミュージアム

長年休耕地だった畑を借り受けて、背丈以上あつた雑草を取り、堆肥を入れてようやく3年目に大豆が実つたという畑には、刈り取りを待つ大豆が大きな実をつけていた。タヌキに食べられた跡もあり、収穫を急がないとと若井さんはつぶやく。

山間部の畑から街へ出る田んぼには、内外の芸術家たちのモニュメント（畔道に立つ子

供、昔の農作業を板やブリキに像つた作品等）が立っている。十日町市の里山を現代アートのミュージアムにするという企画の一端で、1760キロメートルの中に作品が点在している。すべてを見るのに車でも3日は必要で、ガイドには若井さんらも協力している。

事務所に戻ると、長男の悠里さん(32)と次男の春名さん(27)が忙しそうに働いている。悠里さんはパソコンに向かって設計の仕事、春名さんは出来立てのどぶろくの酒瓶にラベルを貼る作業中で、二人は地元の高校を卒業したあと金沢市の大学で学び帰郷したという。二人とも結婚し、若井さんには三人の孫もいる。

「私がいろいろやるのを見たり手伝って育ちましたので、少しは親の手助けをしようと思つてくれているようです。有機農業とそれを味噌や酒に加工する作業は、家族の協力がなないとやっていけませんので助かります」と少し照れながら若井さんは言った。

文／浅井登美子 写真／満田美樹

●(有)若井測量／貧民家みらい☎025-597-2561

安全、美味な農産物を都市住民に

若井さんは「みらい」の開設と同時に、有機農業にも本格的に取り組みはじめた。もともと少年時代から自家製野菜の料理を中心にした食生活をしてきた。東京で暮らしたくな

感謝の気持ちを持ち、使つたあともきれいにしています」と若井さんは言う。

そういえば上越市と十日町市が毎年春秋冬に実施してきた「越後ふるさと体験ツアー」は昨年からは中止したと聞く。その理由の一つが、参加者は安くてサービスの良い旅行をしたいという中高年者が多く、移住を考えている人は数人しかいなかった。私も参加したが、隙間風が寒い等の文句が多く、民家の良さや雪国の暮らしに向き合う意識に欠けていた。



里山に点在するアート作家の作品「フィールドミュージアム」

INFORMATION——ふるさとへU・Iターン! 各地の新規就農相談窓口

●北海道——北の大地へは平成19年に新規就農者が650人に達した。希望地区や仕事も多様で、家賃や経費の一部、旅費、手当等を助成する制度がある。(社)北海道農業担い手育成センター ☎0570-044-055

- ・滝上町/畑作農家、酪農家が6ヵ月以上~1年未満の「短期研修生」募集。研修手当月15万円支給。役場農政課農業担い手係 ☎0158-29-2111
- ・むかわ町/水稲、小麦、豆類、野菜等の農業実習生募集。1ヶ月以上体験できる人で月13万円を支給。農政課 ☎0154-42-2330
- ・月形町/1年目は農家研修、2年目は町の実習農場で花きの栽培技術や農業経営のノウハウを学ぶ。農地や機器、住宅購入等に各種助成制度。産業課 ☎0126-53-2322
- ・美瑛町/パッチワークの美しい丘で稲作、野菜、酪農、畑作の新規就農者募集。研修宿泊寮、就農支援の貸付制度あり。農業支援センター ☎0166-92-7400
- ・他に湧別町、平取町、新得町、浜中町等で就農研修生を募集中。

●青森県——夏季涼やかな気候や昼夜の温度差を生かした有機美味な野菜、果樹を指導。青い森農林振興公社 ☎017-773-3131

●秋田県——野菜栽培や比内地鶏の飼育を中心に新規参入者募集。県内各試験研究機関、農業法人等で短期または長期研修する。研修生には研修奨励金支給。秋田県新規就農支援センター ☎018-884-5512

●岩手県——近年Uターンして就農する人が増加。水産業でも新規参入者を募集。県農林水産部 ☎019-629-5656

●宮城県——トマトやイチゴ等の施設栽培が人気。研修中は月5~15万円支給。みやぎ農業担い手基金 ☎022-264-8238

●福島県——東京からの脱サラや定年後に就農する人が多く、野菜、稲作、果実栽培が主。Uターンして就農するには30万円、過疎中山間地への農業参入者には100万円支援する制度あり。青年農業者等育成センター ☎024-521-9848

●昭和村/かすみ草栽培、からむし織研修生を募集。役場産業係 ☎0241-57-2117

・喜多方市山都町チャルジョウ農場/有機無灌水施設でイチゴ、メロン等を栽培。技術員、一般就農者募集。 ☎0241-38-2463

●山形県——平成19年の新規就農者は171名

でUターン者も93名だった。稲作、花き、野菜、サクランボ、西洋ナシ等の研修。1日体験を経てプログラムに沿って1年間実践研修する。やまがた農業支援センター ☎023-641-1117

- ・朝日町では定年後農業したい人に、りんごや西洋ナシ、ぶどう等の栽培技術指導をしている。産業振興課 ☎0237-67-2114
- 群馬県——群馬農業実践学校で農業(野菜を中心に施設園芸と畜産)の基礎知識と技術を習得、支援制度あり。県農政部技術支援課 ☎027-226-3064
- 山梨県——県北部を中心に新規就農者が参入。果実、有機野菜の取り組み他。山梨県農業振興公社 ☎055-223-5747
- ・イズミ農園(北社市須玉町)ハケ岳山麓で野菜栽培。研修者に給与15万円 ☎0551-20-6230
- 愛知県——北設楽農林業担い手確保育成推進協議会が野菜(トマト)、森林組合山林労務の新規参入を支援。 ☎0536-62-0546
- 長野県——独自の新規就農者親支援制度がありUターンして就農する人も多い。県農村振興課 ☎026-235-7243
- ・ワーキングホリデー(飯田市) 農家の一員として数日間農業や農村生活を実習する。JA南信州生産部 ☎0265-21-3217
- 岐阜県——年間50人程度が新規参入しており、稲作、野菜、果樹等多品目。「農業やる気夜間ゼミ」、定年帰農者対象の技術習得塾他。岐阜県農畜産産 ☎058-276-4601
- 静岡県——がんばる新農業人支援事業として先進農家で1年間研修して就農。研修中は月10万円支給。新規就農相談センター ☎054-250-8991
- 三重県——柑橘の栽培農家を支援。温州みかんを周年生産出荷する体制の指導他。三重南紀元気な里協議会(JA営農企画指導課) ☎0597-92-4545
- 新潟県——コシヒカリ、チューリップ等が人気で年間186人が新規就農(うちUターン者75名)。農業大学校等で研修、就農では農地や機械の助成あり。県農林公社 ☎025-281-3480
- 石川県——アグリ塾で体験したあと農家で3日~3ヵ月農業実習するシステム。石川21世紀農業育成機構 ☎076-257-7141
- 鳥取県——梨、ラッキョウ、プロックロー

白ネギ等ブランド化、体験研修コースを設け就農基金支援も。農林水産部経営支援課 ☎0857-26-7599

- 島根県——しまね暮らし体験(3泊4日)ツアーには毎年100名程が参加し半数は県内に暮らし始めている。I・Uターン者募集 ☎ふるさと島根定住財団 ☎0852-28-0690
- 岡山県——毎年100名強の新規就農があり、実習研修では月15万円を支給する。県農業経営課 ☎086-226-7423
- 広島県——農業法人で就農研修し空家に住む「広島暮らし」を支援。果樹、野菜等の生産直販制度が人気。広島夢プラザ ☎082-544-1122
- 山口県——花きから野菜まで、最大月15万円を助成。農林振興公社 ☎083-924-8900
- 香川県——野菜栽培に取り組み若者が増加。新規就農支援制度あり。 ☎就農相談センター ☎087-851-5777
- 徳島県——就農支援資金の貸付、県農業大学にアグリテクノスクールを開設して実践指導をする。県農業会議 ☎088-621-3054
- 愛媛県——果実、高原野菜栽培に若手就農者が多く、営農インターン推進事業では3ヵ月から2年間研修。新規就農相談センター ☎089-945-1542
- 高知県——Uターンして新規就農する人が多く、インターネット講座、レンタルハウス、遊休ハウス活用事業も。研修は土佐自然塾、窪川アグリ塾へ。県農業会議 ☎088-824-8555
- 熊本県——井草、でこぼん、夏ミカン等日本一のものも多く、新規就農には間司農園、阿蘇エコファーマーズ木之内農園がお勧め。新規就農相談センター ☎096-385-2679
- 大分県——中山間地が7割を占め野菜、花き、畜産等。希望者には里親農家研修を実施。農業農村振興公社 ☎097-535-0400
- 宮崎県——温暖な気候を生かして果実、早出農産物の優良産地。やる気のある人を実践研修し就労先も斡旋。農業振興公社 ☎0985-51-2631
- 鹿児島県——全国第2位の農業生産額を誇り年間約350人が就農する。夜間、通信、短期長期研修修度あり。新規就農相談所 ☎099-213-7223

★農業を仕事にしたい人は新規就農相談センター <http://www.nca.or.jp/Be-farmer/>

編集後記

▽健康を取り戻したという人、人間らしい会話が楽しいという人、取材で出会った人々の言葉はどれも力強い。Uターンという決断が引き出す未知数の可能性は、頭で考えるより遥かに大きいもののように思えた。大地や歴史や地域の人々。その土地ならではの資源を活かせるのもUターンしてこそ可能。こんな時代にこそ新しい一歩を期待したい。(K)

▽田舎で暮らす元校長先生から来た賀状「人間と地球の未来に希望が持てるか?今の私たちは巨大な消費文明の中で暮らしているが、この航路の先に幸せな未来を描けないでいる。模範としてきた西洋の近代思想さえも色あせて見える。私は東洋の思想、とりわけ日本の精神史を学びたいと思う。庶民の思想、村人常民の、自然と共生してきた山人の思想を」(A)

[訂正]「でばら」35号、38頁「赤岩ふれあいの里」の電話番号は☎0279-95-3008、39頁「シンポジウム」講師はあん・まくどなと氏でした。訂正しお詫び申し上げます。

De POLA[でばら] No.36 2009年春夏号

発行日/平成21年3月5日

発行所/財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

<http://www.kaso-net.or.jp/>

編集協力・印刷/株式会社ぎょうせい 編集工房アド・エー



交流居住のポータルサイト
発信中!!
<http://kouryu-kyoju.net/>

交流居住ポータルサイト「交流居住のススメ」では全国約500の各自治体が、田舎と都市を行き来するライフスタイルの情報を提供しています。生活関連情報、滞在施設、体験プログラム、その地での暮らしのノウハウなど、掲載プログラムは全国で約3000件。3種類の検索方法より、必要な情報をお探しいただけます。また、毎月第1、3水曜日にはメールマガジンを発行し、最新の田舎暮らし情報、モニターツアーなどの情報を紹介し

ております。

ポータルサイト「交流居住のススメ」は、交流居住をスタートしようとされている方のサポーターです。田舎暮らしに興味があるなら、一度ご覧になってみては。素晴らしい日本の故郷がお待ちしています。



交流居住
優良事例集
「田舎暮らしのススメ」③

都市で生活しながら時々田舎へ行って、自然や土にふれたり地元の人や文化と交流する「交流居住」。そんな新しいライフスタイルの事例を紹介します。A4判80頁。本誌をご希望の方は(財)過疎地域問題調査会へ。

よーく、調べましょう。

買った宝くじ券、当せん確認しましたか？
よく調べてご確認の上、必ず換金してくださいね。



宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

 財団法人 **日本宝くじ協会**

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

<http://www.jla-takarakuji.or.jp>